ソーム・ヂェニンズがこの問題について云つてゐることは顧慮しないでいゝ、彼は才人なんだから。全く、純粋な慈悲心から行爲することは凡夫にはできないことなのだ。人間の慈悲心には虚榮心や利害やその他何かしらの動機が雜じつてゐる。」

彼は當時バスに居たある婦人を褒めることを私に許さず、かう云つた、「彼女には感服できない。あれは頭が空つぽだと思ふナ。」彼は人物や品行の實に手嚴しい批評家であつた。スレール夫人さへ時折は彼の友情的なお叱りを免れなかつた。ある日のこと、われ〳〵の友人の一人が家庭のかゝりに要すると稱する金額があまり多いので彼と私とで、どうしてそんなに費し得るか、使ひ道を一つ一つ吟味して見た。すると夫人は、子供等の衣服の費用について、馬鹿げて大袈裟なことを云つて、勢ひこんだ我むしやらな差し出口をした。ヂョンスンは一寸怒つた面持ちで云つた、「奥さん、大風呂敷をひろげる時にはひろげるし、計算をする時には計算するもんですよ。」別の時、夫人は、恐らく思はせぶりで、かう云つた、「わたしは飛び翔けるのは御免ですわ。」ヂョンスン、「奥さん、あなたは御自分の翼で飛び翔らなくてはいけない。しかし、御用心なさいよ、翼をちよん切る者がうろついてゐますからね。」何んとこれはうまい言葉ではないか？　そして經驗はそれが眞實であることを、いかに十分證明してゐるではないか！　とは云へ、ちよん切り方が聊かむごく、又必要な限度より遙かに深く剪んだのではあるまいか？*

* ピオッツイ夫人（譯者註、再婚後のスレール夫人を指す）の慌かはしい結婚に際して世に現はれた多くの皮肉な言葉、特に千七百八十八年の『歐洲雜誌』に書かれたバレッティの殘酷な非難に言及したもの、後者に對しては、彼女に對して敵意を抱いてゐたボズウェルさへ流石に贊意を表しかねた。（クローカーの註）

四月二十九日（日曜日）、彼と私はブリストルに遠出した。曾つて『オッシアンの詩』の眞贋について彼が現地に於いて調査するのを見たことがあるが、今度は此所で彼が『ラウリーの詩』（譯者註、トマス・チャッタートン、千七百五十二年――七十年、が殺遺した、十五世紀のブリストルの僧ラウリーの作と稱する詩）の眞贋を現地調査するのを見て私は興味を感じた。……

一七七六年

ヂョンスンはチャッタートンについて云つた、「これはわしが知つてゐる限りに於いては最も非凡な若者だ。この小僧つ子がどうしてあゝいふ物を書いたのか、驚くべきことだ」

ブリストルの宿屋は一向われ〳〵の氣に入らなかつた。「この宿屋を何と評してよいか、一つ考へて見ませう。」ヂョンスンは隙かさず憎まれ口を叩いた、「何と評するつて？――からさ、あんまり悪いんでボズウェルがスコットランドにゐる方がましだと思つた！。」

ヂョンスン博士がロンドンに歸つた後、私は何度も彼の家に往つた。時には私のために宛てられてゐる部屋で寢たりした。私は彼とテーラー博士方、オーグルソープ將軍方、及びパオリ將軍方で正餐を共にした。管々しさを省くため、この期間に於ける彼の會話の記錄を、特に念を入れて叙述する價値がたしかに有るほど著しい場合の外は、話されたそれぞれの情景をわざ〳〵記さず、ひと纏めにすることにしよう。場所や人物が會話の興趣に

加ふるところがない場合は、さういふものを述べて紙面塞ぎをする必要はない。

「人は現在に於いては決して幸福でないといふのは確かに眞實で、人間の不幸からの離脱はすべて、しばらく我を忘れるといふことにのみ在る。人生は不足から不足への道行きで、樂しみから樂しみへのそれではない。」

「病院とかその他の公共設立物の經營を委ねられる者は名義上は澤山居るが、殆どすべての働きは一人の人間によつてなされるもので、それが他の者を驅りたてる。彼の自信と他の者の無性さでさうなるのだ。」

「チェスターフィールド卿の『子息に與ふる手紙』は非常に立派な書物になし得ると思ふ。それから不道德な箇所を除けば、それはすべての若い紳士の手に持たしむべきものだ。上品な態度、やはらかい物腰は徐々に知らず〳〵に身につくものだ。誰にもせよ、《俺は上品になつてやらう》と云ふわけにはいかない。上品な男一人について十人の上品な女がゐる。女の方が愼みぶかいからだ。多少の愼みのない男は我慢がならぬ。が、われ〳〵はみんな女より愼みが足りない。女がみんなの前で坐りながら、大抵の男がするやうに足を前につん出したら、われ〳〵はその足を蹴込みたい誘惑を感ずるだらう。」

私が、或る素晴らしい御馳走に招ばれたが、記憶するに足るほどの會話は一と言も聞けなかつたと不滿がると彼は云つた、「そんな會話は滅多に有るものではない。」ボズウェル、

「そんなら何の爲に食卓で會するのでせう?」ヂョンスン、「一しよに飲み食ひし親しみを厚くするのさ。それには本式の會話は無い方が都合がよいのだ。有ると意見の相違があらはれ、機嫌を惡くし、一座の中でさういふ會話ができない人たちは除けものにされ、良い氣持ちはしないものだ。サー・ロバート・ウォルポールが、自分は食卓でいつも猥談をする、これなら誰でも仲間入りできると、と云つたのはさういふ理由からだ。」

ある紳士が、ヂョンスンがそばに坐つてゐる所で、レヴェット氏に彼に關するあれやこれやの質問をするの聞いてゐてじり〳〵してゐた彼はかう怒鳴つた、「君、君の話題は二つしかない、君自身のこととわしのことだ。わしは兩方ともに飽き〳〵した。」彼は云つた、「人は自分自身のことを云ふものでない、又特定の人間のことをあまりしやべるものでない。人は笑ひ草にならんやう氣をつけなければならぬ、從つて、何か一つの話題を持つてゐて、《今に彼はあの話を持ち出すだらう》と人から云はれるやうなことは避けなければならぬ。オールドフィールド博士といふのがあつたが、この人はしよつちゆうマールバラ公爵のことを話してゐた。或る日彼はさる珈琲店に入り、公爵閣下が貴族院で半時間に亙つて演說した、といふ話をした。《ほんとに半時間しやべつたんですか?》と、外科醫のペルチアが云つた。——《さうです。》——《で、公爵はオールドフィールド博士については何と云ひましたか?》——《何も云やしません。》——《では、あの方は隨分愚知らずですね。オールドフィールド博士の方では十五分も話をしてゐれば屹度公爵の話が飛び出さな

いことは無いのですのにね。》」

「すべての人は、自分にそれが與へられた條件に從つて生存を享けなければならぬ。或る人々にとつては、他人ならば、別に大した害もなしに享け得る自由を自分は享けないといふ條件で生存が與へられてゐる。甲は酒を飲み、その爲に少しも害を蒙らないでゐられる。乙にとつては、酒は非常にはげしい刺戟的影響を與へ、その身心を害し、ことによると絞罪に處せられるに値ひするやうな大逸れたことをしでかさせるかも知れない。」

……

今や私はヂョンスン博士の生涯のうちで私の目に觸れた、頗る珍しい事件を記錄することゝなつた。それには「私が主役を演じて居り」、又それは偏見に囚はれざる人士は大いに彼の名譽を加へるものと見做すに違ひないと私が信ずるものである。

あらゆる種類の有名人と知り合ひになりたいといふ私の欲望は、私をしてほゞ同じ時期に、サミュエル・ヂョンスン博士とヂョン・ウィルクス氏（譯者註、一七二七年——九七年、ホイッグ黨の政客）の兩名へ紹介されることを得しめた。これ以上に懸け離れた二人の人間は全人類の中からも恐らく選び出し得まいと思はれる。二人は各〻その書いたもの〻中で幾分の辛辣さを以つてお互ひを攻擊さへした。然るに私は常に兩方と親しいつき合ひをしてゐたのである。私は各〻の長所を十分理解することができた。私はつねづね同一人に於いて善い性質を惡い性質から分離する、かの知的の化學とも云ふべきものを樂しみとしてゐたからである。

サー・ヂョン・ブリングルは「私自身の友人であり同時に私の父の友人」であるが、この人とヂョンスン博士とは共に私が尊敬し懇意に願つてゐるのであるから、二人を互に知り合ひにしようと私は望んだがつひに果さなかつた。この人は曾つて次のやうに巧みな云ひ廻しをした、「友情は數學とは違つて、それ〴〵第三者に等しい二つのものはお互ひに等しい、といふわけにいかない。あんたは中間體としてヂョンスンとよく合ふし、同樣に私とも合ふ、しかしヂョンスンは私とは合はないだらう。」サー・ヂョンは十分な融通性を示さなかつたので私も手を引いた。それにヂョンスンの側でも同じ位強く毛嫌ひしてゐるのを承知してゐたから。彼は、サー・ヂョンに對し、その人がスコットランド人であるといふ以外に他に何かわけでもあるのか私には見當もつかないのだが、頗る不當な評價を下してゐた。が、私はヂョンスン博士とウィルクス氏を、できたら一しよにしたいといふ、抑へがたい望みを抱くやうになつた。いかにしてそれを實現するかは微妙にして困難なる問題であつた。私の尊敬する友人である、ボールトリー路の書籍商ディリー氏兄弟は、五月十五日（水曜日）にウィルクス氏、他數名の紳士と會食すべく私を招待した。この兄弟の鄭重で御馳走の多い食卓に於いて私は、サー・ヂョシュア・レノルヅのそれを除いたら、最も多くの文學關係の人々を見ることを得たのである。私は云つた、「どうぞヂョンスン博士もお招きして下さい。」——「ウィルクス氏と一しよにですか？　とんでもない、そんなことをしたらヂョンスン博士は決して私を赦してくれませんよ。」とエドワード・ディリー

氏は云つた。「よろしい、」と私は云つた、「もしあなたが私に、交渉を委せるなら、萬事うまくいくやうに私が責任を負ひませう。」ディリー、「なるほど――あなたが引き受けて下さるのだつたら、御兩人に來て頂けばこつちは大へん嬉しいわけです。」

ヂョンスン博士に對して抱いてゐる深い尊敬にも拘らず、彼が時々多少あまのじやくな氣分によつて動かされることを知つてゐた私は、この點を利用して目的を達しようと狙つたのである。もしぶつつけに彼に向つて「先生、ウィルクス氏と會食なさいませんか？」と申し出たならば彼は忽ちに怒つてから答へたかも知れない、「ヂャック・ウィルクスと會食だつて！　それくらゐならヂャック・ケッチ（譯者註、千六百八十六年に殘忍な死刑執行吏死す。）と會食するわ。」* それ故、私は或る晩彼の家で二人だけで靜かに坐つてゐた時に折を見てから切り出した、「ディリー氏は先生に敬意を表し、私も近いうちにスコットランドに歸らなければならないさうだから、私と一しよに來週の水曜日に先生が正餐に御出席下さつたら忝けない、と申しました。」ヂョンスン、「ディリー氏にお禮を云ふよ。わしは出席しよう――」ボズウェル、「正餐にあつまる人間の顏觸れさへ氣に入つたら、とおつしやるのでせう。」ヂョンスン、「君は何を云ふんだ？　君はわしが、一箇の紳士に向つてその人の食卓にどんなお客を招くべきか、此方で指圖するつもりになるほど世間知らずだと考へてゐるのか？」　ボズウェル、「濟みませんでした、つい、先生が、お嫌ひさうな人たちと會ふことにならないやうにと思つたものですから、ことによるとあ

の人はあの人の所謂愛國的な友人等を幾人か招くかも知れないのです。」ヂョンスン、「さうだつたら、どうだといふのさ？　このわしが彼の愛國的な友人たちを何んと思ふものか、フン！」ボズウェル、「ヂャック・ウィルクスが出ないとも限りません。」ヂョンスン、「たとへヂャック・ウィルクスが出たからつて、それがわしにどうだといふのだ？　君、こんな話は打ち切りにしよう。腹を立てゝ君には濟まなかつた、しかし、わしが時たまにはどんな仲間とでも一しよになれるといふことを否定するやうな口振りを洩らすとはどうも腑に落ちない扱ひだね。」ボズウェル、「どうぞ、お赦し下さい。惡い氣で申したわけではございません。ですが、先生は誰が來ても會つて下さるんですね、私のために。」かう念を押して置いて、私はディリーに彼が定めの日に喜んで客の一人になるだらうと報告した。

* この言葉がヂョンスンがほんとに云つたやうに流布されてゐるが實は私がさう想像しただけなのである。

待ちに待たれた水曜日、正餐の約半時間前に私は彼を訪れた。二人で外で正餐する場合は私はよくさうしたもので、彼が間に合ふやうに支度ができてゐるかどうか見屆けて一しよに出かけるのである。彼は、前にもさういふことがあつたが、埃りを浴びて書物をいぢくり廻して居るところで、外出の用意は一向にしてゐなかつた。私は云つた、「これは一體どうしたことです？　今日はディリー氏の正餐に出かけることになつてゐるのをお忘れなのですか？」ヂョンスン、「ディリーのところに出かける氣はなかつた。あのことはすつかり忘れてしまつた。うちで食事するつもりでウィリアムズ孃に支度を命じてしまつた。」

ボズウェル、「ですが、御承知の通り先生はディリー氏のところに往く約束をなさいました。そして私はさうつたへたのです。彼は先生を待つてゐます、おいでにならないと大へん失望しますよ。」ヂョンスン、「君からウィリアムズ嬢にそれについて話してくれ。」

困つたことになつた。私がすつかり成功したと思つたことが、こゝまで濟ぎつけて水の泡になる惧れがあつた。彼はウィリアムズ嬢に對して日頃から思遣り深い配慮を加へてゐて、その爲に自分の都合は犠牲に供することが屢々あつた。だから彼女が頑ばつたら彼は出かけないといふことが私には解つてゐた。で、私は急いで階下に降り、この盲目の婦人の部屋にはせつけて、ヂョンスン博士は今日ディリー氏方で正餐することを私に約束して置いたのに、その約束を忘れて家で食事の支度を命じたと云つてゐるので、私はひどく當惑してゐる、と彼女に打ち明けた。「さうなんです、」と彼女は相當氣嫌を悪くして云つた、「博士は家で食事されることになつてゐますよ。」――「ねえもし、」と私は云つた、「博士は大へんあなたを大事にしてをられるので、あなたがほんとにさう望まれない限りは博士はお出かけにならないといふことが私には解つてゐます。けれども、あなたはしよつ中博士と一しよに居られるのだから、濟みませんが一日だけ博士を貸して下さい。ディリー氏は立派な人で今までに何度も自宅でヂョンスン博士のために結構な招待會を催してゐるので、今日博士がすつぽかされると氣を悪くするでせう。それにあなた、私の立場も考へてやつて下さい、私は言傳てをつたへ、ディリー氏にヂョンスン博士は御出席になると保證

しました。先方は勿論食事の準備をとゝのへ、相客を招待し、博士が來て下さるといふ光榮を吹聽してしまつたに違ひありません。博士がおいで下さらなかつたら私の面目は丸潰れです。」彼女は次第に私の懇願――それは確かにいかなる種類のものにもせよ婦人に對する大抵の願ひ事に劣らず熱心になされたものであつた――に折れて來て、有難くも「よく事情を考へた末自分は博士がお出かけになるべきだと思ふ」とヂョンスン博士に私が傳へることを御聽許になつた。私は彼の所に飛んで返した。彼は事の成り行きに無關心で、「往かうと往くまいとどつちにでも勝手になれ」とばかり、相變らず塵にまみれてゐた。が、私がウィリアムズ嬢の承諾を告げるや否や、彼は「フランク、綺麗なシャツを出せ。」と大聲で呼ばはり、忽ち着換へをすませた。彼を貸馬車の中に私と共に乘り込んで坐らせてしまつた時には、財産目あての結婚を志す男が相續娘を旅行馬車に乘り込ませ二人でグレトナ・グリーン（譯者註、イングランドとの境界近くにあるスコツトランドの村、既者の結婚地として有名、スコツトランドの結婚法が簡單であるため）にでかけるところのやうな喜びを感じた。

われ〳〵がディリー氏の應接間に通ると、彼は自分が見知らない仲間に圍まれてゐるのを見出した。私は目立たぬやう、又口數をきかぬやうにし、彼がどう振舞ふか注目してゐた。私は彼がディリー氏に、「あの紳士は誰かね？」と囁くのを聞いた。――「アーサー・リー氏です。」ヂョンスン、「ツー……ツー……ツー……」さう口の中で呟いたがそれは彼の癖の一つであつた。アーサー・リー氏はヂョンスンにとつて甚だ氣に喰はぬ存在であら

ざるを得なかつた。氏は「愛國者」であるのみならず「アメリカ人」でもあつたから。後年氏は合衆國からマドリッド宮廷に派遣された公使となつた。「そんならレースのついた服を着た紳士は？」――「ウィルクス氏です。」この返事は前にも增して彼を驚かせた。彼は自らを制するに幾分困難を感じ、一冊の本を取り出し、窓下の腰掛に坐つてそれを讀んだ、或ひは少くとも暫くの間ぢつと目をそれに曝してゐたが、その間に氣分を鎭めたのである。彼の感情は恐らく隨分穩かでなかつたであらう。が、彼は疑ひもなく、相手によつては彼が狼狽することもあるだらうと私が想像したのを自分が叱つたのを想ひ出したのであらう。そこで彼は、出くはすことのあり得る人々の性質や態度に直ちに順應することのできる、全く世慣れた人として振舞はうと斷然決心したのだ。

「食卓の準備ができました。」といふ元氣づける聲が彼の物思を破つた、そしてわれ〳〵はみんなが不愼嫌の徵候は少しもなく席についた。ウィルクス氏、アーサー・リー氏――彼は彼がエディンバラで醫學を學んだ時以來の私の古い友人である――の外、そこにはミラー（氏今はサー・ヂョン・ミラー）、レットサム博士、及び藥種商のスレーター氏が席に列なつた。ウィルクス氏はヂョンスン博士の隣りに席を占め、いろ〳〵と氣を配り懇ろに振舞つたので、いつとはなしに彼の氣に入るやうになつた。ヂョンスンほど思ふさま物を食べる人はなく、美食珍味を彼ほど愛した者はなかつた。ウィルクス氏は何か上等な犢肉を頻りと彼に取つてやつてゐた。「一寸失禮――こゝの所がよいでせう――蒐色の所を少し

――脂の所を少々――詰め物を少々――タレを一寸――バターを少々差し上げませう――このオレンヂの絞り汁をお勸め致したい――いや、レモンの方が味を益すかも知れません。」――「これは、これは、恐縮です。」とお辭儀してヂョンスンは叫んだ。はじめのうちは「氣むづかしさうな禮儀正しさ」の顏をそつちに向けてゐたが、しばらくする中にそれは滿足さうな顏に變つた。

一　フットの話となつてヂョンスンは云つた、「彼は良い物眞似師ではない。」一座の一人は
七　それに和した、「たいこもち、道化藝人だ。」ヂョンスン、「が、彼は機智をもつてゐる、思
七　想も無くはないし、想像力の豐富さと多樣さを有して居り、讀書も多少はしてゐて、自分
六　の役を充たすに足るだけの知識はもつてゐる。一つの種類の機智は多分に有してゐる――
年　うまく體を躱すことだ。われ〳〵は兩手で彼を隅つこに押しつける――ところが取り押へたと思つた時に彼は逃げてゐる――頭の上を飛び越して逃げる動物のやうに。それから彼は非常に廣範圍にわたる機智を有してゐる、彼は自分と冗談との間に眞理を立たせるやうなことは決してない、それから時々ひどく卑猥なこともある。ギャリックはフットがそれから自由であるところの多くの拘束を蒙つてゐる。」ウィルクス、「ギャリックの機智はチェスターフィールド卿のそれに一層よく似てゐます。」ヂョンスン、「わしがフットと最初に落ち合つたのはフィッツハーバートの所でした。わしはあの男をあまり良く思つてゐなかつたので、わしは面白がるまいと決心しました。面白がるまいと思つてゐる人間を面白

がらすことは非常にむづかしいことです。わしは彼を意に介しないふりをして隨分とむづかしい顏で食事をつゞけました。けれども、やつこさんは頗る滑稽的なので、わしはナイフとフォークを投げ出し、椅子の背に身を投げかけ、大笑ひに笑ひこけざるを得なくなつた。全く、あれに會つてはかなはない。彼は金を儲けるためにあれやこれやの方法を試みたが、ある時は稀薄麥酒釀造業者の共同者となり、自分の多くの知合ひの中からお得意を獲得する毎に利益の分け前を貰ふことになつた。フィッツハーバートも彼の稀薄麥酒を取つた一人であつたが、馬鹿に品が惡いので召使どもはそれを飲まないことに決心した。が、主人を怒らすことを恐れて――主人がフットを大いに贔屓にしてゐることは彼等も承知してゐた――自分等の決心をどうして通じたものか多少の當惑を感じた。遂に、彼等は主人のお氣に入りの黑ん坊の少年に白羽の矢を立て、彼等の代表として抗議を申し入れさすことにした。かくて臺所の全權を彼に荷なはせて、彼等すべての名に於いて某の日に、この少年が、自分たちはフットの稀薄麥酒を今後飲まないつもりである旨をフィッツハーバート氏に申し入れることゝなつた。その當日、フットはたま〳〵フィッツハーバート家で正餐することになり、この少年が食卓の給仕をした。彼はフットの話とふざけぶりと餘のしかめ方にすつかり嬉しがつてしまひ、階下に降りて往つたときに皆にかう云つた、《あの人は僕が今までに會つたうちで一ばん立派な人です。僕はあんた方の言葉を御主人樣に傳へるのは厭やです。僕はあの人の稀薄ビールを飲みます上。》と。」

誰かゞギャリックはさうはできなかつたらうと云つた。ウィルクス、「ギャリックなら稀薄ビールを益々稀薄にしたことだらう。彼はいよ〳〵舞臺から引退することになつた。が、《あくせく男》の役は死ぬまで演ずるだらう。」私は、ギャリックが曾つて私に云つたことがある通り、ヂョンスンは自分自身以外の者がギャリックを攻擊するのを許さないことを知つて居り、そして又彼がギャリックの物惜しみしない點を褒めるのを聞いたことがあつた。そこで、有名な弟子に對する彼の褒め言葉を云はせようと思つて私は大きい聲で云つた、「私はギャリックが物惜しみをしないといふ評判を聞いてゐます。」ヂョンスン、「その通りだ、ギャリックがわしの知つてゐるどの英國人よりも多くの金を與へてゐることをわしは見てゐる。それも見せびらかす氣持からではない。ギャリックが世に出た初めはひどく貧乏だつた、だから金が這入るやうになつてからも、それを人に與へるのが下手で、溜めてはならない時に溜めたりした。が、その餘裕ができるや否や彼は物惜しみしないやうになつた。ところでわしは、彼が蒙つた慾張りの評判は却つて彼にとつては仕合はせで、多くの敵をつくることを免れしめたと見てゐるのだ。慾張りだと、世間の人は輕蔑するが憎みはしない。役者の分際で豪奢な生活をするといつて攻擊されたとしたら、もつと徹へただらうに。人々がこの急所を衝くだけの氣働きがあつたら、もつと彼を惱まし得たらう。然るに彼の慾張りの點ばかりをやかましくはやしたてるだけだつたから、彼はひどい恥辱と嫉妬とは免れ得たのだ。」

一七七六年

アーサー・リー氏はアメリカの不毛の土地を所有したスコットランド人の話をし、何故そんな所を選んだのかと不審がつた。ヂョンスン、「だつて、不毛と云つてもすべて相對的なものですよ。スコットランド人は不毛だとは思はないんでせう。」ボズウェル、「もしもし先生、この人は英國にお追從してゐるのですよ。先生はスコットランドに御旅行になつたんですから伺ひますが、あそこに飲食物がたくさんにありませんでしたか、どうです？」ヂョンスン、「住民に故國から逃げ出すだけの力を與へるには十分な飲食物はあつたよ。」かういふ響の物に應ずるやうな、發刺とした奇警な言葉は、遊戯的に、ほんの冗談に、笑顔を以つて云はれたもので、彼がたゞ機智を目的としたものであることは明かである。この問題については彼とウィルクス氏は全く一致することができた。こゝには兩人の同盟が成立したが、兩人共にカレドニア（譯者註、スコットランドの古名）を訪れたことがあるのだから、それが饑饉の國だと考へるやうな人々の奇態な狹量な無知については十分心得てゐるものと私は信じてゐる。が、二人はこの昔ながらの冗談をつゞけて面白がつた。私は次の點でスコットランドがイングランドに優越してゐると主張した。即ち、スコットランドでは何びとも、單に他人がそれを訴へ出たといふ理由で負債のために拘引されることはない、先づ裁判所がそれを正當と認める判決を下さなければならぬ、而して判決が下される前に當人を拘束するといふことは、彼が本國から逃亡しようと――專門語を以て云へば逃亡を企圖――してゐるといふことを債權者が宣誓した場合に於いてのみ可能なのである。私が右の樣に云ふと、ウィルクス、「すべてのスコットランド國民についてそれを宣誓しても間違ひあるまいと思ふね。」ヂョンスン、（ウィルクスに向ひ）「あなたに一寸申して置きますが、わしは近ボズウェル君を伴つて英國の田舍町の純粹な文化生活を見せてやつたのです。わしの生れ故郷の町のリッチフィールドで、一度はほんとの文化といふものを見て置くやうにと自由に放してやりました。彼はふだんスコットランドでは野蠻人の中で暮らし、ロンドンでは道樂者の中で暮してゐるんですからね。」ウィルクス、「あなたやわたしの樣な、眞面目で謹嚴で端正な人とゐる場合は別ですがね。」ヂョンスン、（ほゝゐみながら）「さういふ場合、われ〳〵の方ではこの男のことを羞づかしく思つてゐる。」

・・・・・・・

一七七六年

パーク氏はこの取り持ちの成功について大へんに私を褒めてくれた、そして冗談にかう云つた、「全外交團の歴史に於いてもこれに匹敵するほどの例は見られない。」

私はヂョンスン博士を家まで送りとゞけた。そして彼がウィリアムズ孃に向つて、ウィルクス氏と一しよになつてどんなに愉快であつたか、そしてどんなにたのしい一日を過ごしたかを語るのを聞いて滿足を感じたのであつた。

・・・・・・・

次の日の晩、私はスコットランドに出發する暇乞ひに彼を訪れた。私は彼のいろ〳〵な親切に對して厚く禮を述べた。彼は云つた、「君、君のことはいつでも大いに歡迎するよ。

君ほどよく酬いる者は他にゐないよ。」

・・・・・・

ウエストミンスター寺院に於けるゴールドスミス博士の墓碑のために彼の書いた碑銘についての次の手紙は、彼の取りつくろはぬ謙遜と、自分の書いたものに對する無雜作な態度と、手紙の宛てられた相手たる卓越した人物の趣味と判斷力について彼の抱いてゐた大なる尊敬をあらはしてゐる。

「サー・ヂョシュア・レノルヅ宛

拜啓。どういふ理由からかよく解りませんが御無沙汰に打過ぎました。又かやうな煩はしいさまたげがいつになつたら終ることか見當がつかない次第です。ですから小生は氣の毒な親友たるドクトルの墓碑*銘を貴兄にお送りすることに致しました。先づ貴兄がお讀み下さつて、差支へないとお思ひになつたら倶樂部の連中にお示し下さい。素より小生は喜んで訂正に應じます。貴兄が何かそれについて重大な異議をおもちになるならば、お目にかゝる時までお手許に保留しておいて下さい。二通お送りしますがカードに認めた方を採用したいと思ひます。日附についてはバースィ博士によつて確める要があります。敬具。

千七百七十六年五月十六日　サム・ヂョンスン」

* 譯者註、Nullum quod tetigit non ornavit（彼ハ手ヲ觸レシモノヲ悉ク美化シタリ）といふ有名な一行を含むこの碑銘は全文ラテン語で書かれてゐたので「文學倶樂部」員一同は「文壇の君主に對する抗議」を最

一七七一

出した。しかし彼等はヂョンスンを恐れてラウンド・ロビンの形式を用ひた。即ち一つの圓を畫いてその中にバークの文案になる抗議の趣旨を書き、圓周の外側にバーク、レノルヅ、ギボン、フォーブズ、ウオートン等十二名の學界文壇の錚々たる連中が署名した。ラウンド・ロビンは水夫が徒黨を組んで要求する際などに用ひる方法で誰が主唱者であるかを秘するわけである。レノルヅがそれをヂョンスンに渡した時彼は上機嫌で受取つたが、自分は碑銘の内容ならばどの樣にでも變更しようが、ウエストミンスター寺院の壁を英語の文句でけがすことは斷じて承服しないと諸君に傳へてくれ、と云つた。結局その文句は何の變更も加へられずにゴールドスミス博士の碑面に刻まれた。

七七一年

千七百七十七年、年齡六十八歳、――・・・・

「ボズウェル氏よりヂョンスン博士へ

千七百七十七年七月二十八日、エディンバラにて

拜啓。今日は先生がロンドンをお立ちになる日です。（譯者註、ヂョンスンはオックスフォド、リッチフィールドを經てアッシュブアンのテーラー博士を訪れ、そこにボズウエルを招く）私は味氣ない法律の仕事の合間々々にオックスフォド行きの驛馬車の中にゐる先生のお姿を思ひ浮べてほゝゑましい氣持になつてゐます。しかし、去年、同じ乘物で先生と私が旅行した時、先生が建築家のグウィンと冗談をたゝかはされた、あの時ほど樂しい旅行をなされたかどうかは疑問だと思ひます。旅行中の出來事といふものは特別な喜びを以つて回想されるものです。それは快活な氣分につつまれて保存されてゐて、われ〳〵が最初にそれを經驗した當時の陽氣さ、或ひは、少くともその時の活力を帶びて

再びわれ〳〵の心の中に蘇ります。」・・・・

「私は尙附け加へて、私が彼に會ふことを妨げたかも知れない事件が起つたこと――私の家内が肺病の慮れのある症狀に惱んだが、今では持ち直したこと――を報知した。」

「ヂェームス・ボズウェル氏へ

拜啓。本日アッシェブアンに參りました。差しあたり申し上げることは、テーラー博士が貴兄を歡迎すると申してゐること丈けです。小生がいかに貴君を歡迎するかは御承知のとほりです。何時おいでになれるか至急御報知下さい。

ボズウェル夫人に宜しく。彼女に、われ〳〵は今後仲違ひすることはあるまいと小生が望んでゐるとお傳へ下さい。敬具。

千七百七十七年八月三十日　サム・ヂョンスン」

「ヂェームス・ボズウェル氏へ

拜啓。土曜日に當地に着くと早速小生はごく短い手紙を書きました。小生の方も貴君に劣らずお會ひしたがつてゐることをお知らせするためです。人生は遲延を許しません。一時間ごとにわれ〳〵を樂します物の一部が失はれて行きます、そして多分われ〳〵の樂しみを感ずる氣分の一部も。リッチフィールドに來て見たら昔友達のハリー・ヂャクスンが死んでゐました。それは損失、しかも取返しのつかない損失でした、彼は小生の幼な友達の一人でしたから。小生は何時までも新たに友人を得ることを希望します、しかし價値や

有用さの故に得られた友人は昔馴染の埋め合せにはなりません。後者は若き日を想ひ出させ、昔喜びを與へたあれやこれやの記憶を蘇らせます。貴君と小生がずつと老年となれば、ヘブリディーズ諸島の旅行について語りあつて大いに愉快を感ずることでせう。

それまでに何か、他に面白いことを計畫するのも惡くはないでせう、一體何になるか、それは一寸わかりません。シドニーが云つた通り

《德と運命と酒と婦人の胸の中に》（譯者註、サー・フィリップ・シドニー、一五五四年――八六年、の十四行詩の最後の一行、原詩には「德」が「自然」に、「酒」が「時代」になつてゐる）任せておくのですね。といふのはこの相談にはボズウェル夫人の御意も伺はなくてはなりますまいから。

貴君のお氣に召すことが一つあります。博士は、小生の推察するかぎり、われ〳〵を十分勝手にさせてくれさうです。今日は小生が階下に降りて往く前にもう外出してゐました、正餐までは歸つてこないでせう。貴君にお見せするため氣の毒なドッド（譯者註、ウィリアム・ドッド博士、千七百二十九年――七十七年、後出）に關する書類を持つて來ました。造作なく目を通せるものです。

當地に參る前、あはれなウィリアムズ孃を田舍にやりました。粘液流下で大分惡く、徐徐に衰弱してゐますが、醫者はそれを止めることができないと云つてゐます。小生は考へ及ぶ限りのことはし、彼女の旅行と滯在を安樂に便利にするやう、あらゆる計らひをしました。が、彼女は衰弱と苦痛の病的狀態で僅かの間生き延びるだけなのではないかと恐れてゐます。

スレール家では大人も子供もみな元氣で、マイケルマスにはブライトヘルムストンに行かうとしてゐます。小生のことを誘ふでせう。小生は行くかも知れませんが、ずつと滯在する氣にならうとは思ひません。が、未來のことは何とも云へません。

ポーター孃は元氣です。しかし、ストーヒルの婦人等の一人であるアストン孃は急に身體不隨に陥り、恢復の見込みは無さゝうです。われ〳〵にもかういふ發病が何時起らないものでもない！

御手紙を書いて何時頃おいでになるか御知らせ下さい。敬具。

アッシュブアン、千七百七十七年九月一日、サム・ヂョンスン」

・・・・・・・

九月十四日（日曜日）の夕刻、私はアッシュブアンに到着した、そして直ちにテーラー博士の玄關口に車を乘りつけた。ヂョンスン博士と彼は私が旅行馬車から降りないうちに姿をあらはし、ねんごろに私を歡迎した。

・・・・・・・

正餐の際（翌日）テーラー博士の隣人が數人加はつた。善良な禮節ある人々でヂョンスンをよく理解してゐるらしく、或る人が彼の聲と態度に氣押され、膽をつぶされて、後日彼をどう思ふかと訊かれて「あれは恐ろしい人だ」と答へたといふ話のやうな見方はしてゐないやうであつた。

ヂョンスンは私に云つた、「テーラーはなか〳〵物の解つた鋭い人物で精神がもつちりしてゐる。ある方面では非常に活動的であるが又一方、一種の物臭さをもつてゐて、彼の爐棚に小石を一つ置いておけば、一年後になつてもそのまゝになつてゐるのを見出すであらう。」

この邊で、ヂョンスンが尊師（レヴァレンド）ウィリアム・ドッド博士のためになした、情け深く熱心な奔走を述べて置くことが適當であらう。この人は曾つてのブレコンの受祿僧で陛下の常任教悔師であり、大へん人望のある說教師として有名であり、慈善事業の援助者であり、主として神學であるが各種の著作をしてゐる人である。道樂な性分も手つだつて、不幸にも浪費的な生活の癖がついてゐた彼は、或る時金錢の必要にせまられ、自分の窮狀が曝露されるのを恐れて、手形を僞造するといふ破目に陥つた。それによつて自分の信用を維持しようと試みたので、そのうち發覺しない前にその金額を支拂へるだらうと望んでゐたのである。彼がさういふ風に無謀にも又罪深くもその名を騙らうと敢へてした相手は、チェスターフィールド伯爵であつた。彼はこの人の私敎師をしてゐたことがあるので、苦しまぎれの心のうちで、まさかの時には伯爵は、商業國に於いては最も危險な犯罪とされる、僞造についての法規を破つたことに對する恐ろしい結果にみす〳〵彼を委ねるやうなことはなく、寛大にその金を支拂つてくれるだらうと蟲の善い考へをしてゐたのである。が、この不幸なる牧師は悔やしくも思ひ違ひをしてゐたことを悟つた。彼の弟子であつた貴族は

彼を告訴し、彼は死罪を宣告された。

ヂョンスンの話では、ドッド博士は、もう何年も前のこと、一度彼と同席したことがあるだけで極くわづかな知り合ひであつたさうである。（私自身とドッドとの關係も丁度同じことであつた。）が、ドッド博士はこの窮地にあつてヂョンスンの說得力の强い筆の力を思ひ出し、事によつたらそれに縋つて王の特赦が得られはしないかと考へた。彼は直接ヂョンスンに賴むことはせずに、異樣にも思はれるが、故ハリントン伯爵夫人の手を通じた。夫人はヂョンスンに手紙を送つてドッドのために彼のペンを揮ふやうに依賴した。印刷業者アレン氏はヂョンスンの家主でありボールト・コートでは隣りに住んでゐて、彼の方でも好意を寄せてゐたが、この人もドッドの友人の一人であつた。尙、ドッドについては、人間の名譽のために云つて置くが、彼が法律に觸れた結果死罪に行はるべき者といふ境遇に沈んだ後にも彼を見棄てない人々が多く有つたのである。アレン氏が私に語つたところによると、彼がハリントン夫人の手紙をヂョンスンに傳へたのであるが、ヂョンスンは部屋の內をあちこち歩きながらそれを讀み、大いに心を亂した樣子であつたが、やがて「できるだけのことはやつて見よう。」と云つた。――そして實際彼は異常な努力をしたのである。

・・・・・・・

王の慈悲を乞ふすべての歎願は空しくなつたのでドッド博士は死の覺悟をした。そして

熱い感謝の念を以つて次のやうな手紙をヂョンスンに寄せた――

「六月二十五日、夜半

御ん身偉大にして善良なる心よ、わがために爲されたる御ん身のすべての仁愛にして深切なる努力に對するわが切實熱烈なる感謝と祈禱を受け容れたまへ。――おお！　ヂョンスン博士よ！　余は若き頃より御ん身との交はりを求め得たるものなれば、かくも卓越せる人物の愛顧と知遇とを努めて深くし置かば良かりしものを！　――余は神が御ん身を最高の悅榮――憐れみ深く仁愛的なる努力をなしたりといふ心內の自覺――を以つて祝福されんことを眞ごゝろ罩めて祈る！　――而して御ん身より先に祝福の國に入るを許されるときは（余はそれを許さるべきことを信じて疑はず）、余は歡びを以つて御ん身の到着を迎へ、御ん身が余の慰藉者たり辯護者たり友人たりしことを謝むるを喜びとせん！　神とこしへに御身と共にあれ！」

一七七年　ヂョンスン博士は最後にかういふ感かな、そして慰める手紙を書いた――

「博士ドッド師へ

拜啓。人としてすべて免れがたい定めが今や貴下にせまつてゐます。外部的の諸事情、人目や人の思はくは、天と地の最高の審判者の前で、まさに永遠のための裁きを受けようとしてゐる不死なるものの顧慮に値ひしません。氣を引きたてなさい、貴下の罪は、道德的又は宗敎的に考へて見れば、甚だ深く邪惡に染まつてはゐません。それは何んびとの節

操をも腐敗せしめませんでした。それは何びとの生命をも攻撃しませんでした。それは只、一時的な、そして償ひ得る損害を生じたゞけです。それについて、又その他のすべての罪については貴下は切に悔悟すべきです。而して、われ等の弱さを知りたまひ、われ等の死は望みたまはざる神が、その子、われ等の主イエス・キリストのために貴下の悔悟を受け容れたまはんことを！

貴下が強くお認め下されたる、小生の好意に出でたる奔走の酬いとしては、貴下の祈禱のうちに於いて小生の永遠の福祉のために一つの請願をさゝげて頂きませう。敬具。

千七百七十七年、六月二十六日　サム・ヂョンスン」

この手紙の寫しの下にヂョンスンの自筆で「次の日、六月二十七日、彼は處刑された。」と書かれてあるのを私は見出した。

・・・・・・

ヂョンスンはこの晩、例のいかにも巧みな辨別的なやり方で、ダービィシア州の故フィッツハーバート氏の人となりをわれ〳〵に語つた。彼は云つた、「フィッツハーバートには閃めきとか華々しさとかは見られない。しかし彼ほど一般に人あたりの良かつた男は知らない。誰をもすつかり氣樂にさせ、何んびとをも自分の才能の優越で壓倒することをせず、彼と競爭する立場に立つても誰をも氣まづい思ひをさせず、いつも聽き手に廻るやうであり、自分の言ふことを澤山聞くやうに相手に強ひることなく、相手の言ふことに逆らうこ

とをしなかつた。すべての人が彼を好いた。が、彼は友人――わしの考へるやうな友人――をもたなかつた、心を打ち明けあふやうな人は一人ももたなかつた。世間の人は彼のすることとなすことを善い方に解しようとした。ある紳士が、――よくやることだが――ロンドンの近くの學校に往つてゐる「うちの秘藏息子」についての取越苦勞をわざとらしく大仰に述べたてた、――息子が病氣をしやしないかとどんなに心配してゐるか、又、どんなに會ひたいか、とか。するとフィッツハーバートは云つた、「旅行馬車に乘つて會ひに行かれたらよいでせう。」これは正にそのわざとらしい男に止めを刺した、が、別に大したこともない言葉だ。*ところが、これが一七七七年中、そして確か夏にまでかゝつて、機智（ウイット）として喧傳された。これは却つて彼があまり機智に富んだ人間でない證據だ。彼は、人間といふものは概して積極的な性質によるよりも消極的な性質によつて――大きな喜びを與へることよりも決して相手を怒らせないことによつて人に好かれるものだといふ考への眞實なことを示す一例だ。第一、人は愛する場合より憎む場合の方が根強い。一遍誰かを傷つけるやうなことを言つてしまふと、その人の氣に入りさうなことを澤山言つて見ても前の取り返へしはつかない。」

* 王室侍醫のギズボーン博士は、この話のヂョンスンが傳へ聞いた以上の委しいいきさつを私に教へてくれた。わざとらしい紳士は故ヂョン・ギルバート・クーパー氏であり、『ソクラテス傳』の著者でドッヂリーの『詩選』中の幾篇かを書いた人である。フィッツハーバート氏は或る朝との人が、息子の病氣の故に、慰めや

うもないほどはげしい心配にくれてゐる模樣なのを見出した。ところが、やがて彼は「わたしはエレジー（悲哀詩）を書かう。」と叫んだものだ。それを聞いて彼の感情の眞劍味のほどがわかつたのでフイツツハーバートは後さうに云つた、「それより旅行馬車に乘つて息子さんの樣子を見にいらした方がよくはありませんか？」この話を喧傳せしめたのは、このあてこすりの辛辣さである。

九月十六日（火曜日）、ヂョンスン博士はテーラー博士が飼つてゐる牛の珍しく大きいことと高價なことを私に話したので、私はこの家の主人と共に馬を驅つて、その農場を見まはり、彼が百二十ギニーで賣りわたした牝牛と、もう一頭百三十ギニーで買ひたいと人に云はれた牝牛を見せて貰つた。テーラーは昔の學校友達であり友人であるヂョンスンのことをかう私に嘆した、「彼は非常に明晰な頭腦と、言葉を驅使する大なる力と、非常に活潑な想像力を具へた人です。が、彼と議論はできません。彼は相手の言ふことに耳を傾けようとしません。それから、より大きな聲をもつてゐるので相手を怒鳴り負かさなければやみません。」

・・・・・・・

晩方、リッチフィールドのシーワード師が家に歸る途中でアッシュブアンを通りかゝつたのでわれ〳〵と一緒にお茶を飲んだ。ヂョンスンは彼のことをかう云つた、「彼の野心は話上手と云はれることだ。だから、自分の話を聽いてくれる仲間のゐさうなバックストン（譯者註、ダービイシア州の溫泉町）とかさういつた所に出かけるのだ。それから、彼はしよつ中自分のか

らだをいぢくつてゐる、病弱を看板にしてゐる男の一人だ。病弱を看板にしてゐるほど不愉快な性格はあるまい。自分の安樂のためにはどんなことをしても差支へないと心得、したい放題にわが身を甘やかす、實際、豚小舍の豚同然の體たらくになる。」

一七七年　たま〳〵テーラー博士が鼻血を出した。當人は、三月毎に四日間瀉血して貰つてゐるのだが、それを怠つたからだと云つた。醫學の方は大いに嚙つてゐるヂョンスン博士は定期的瀉血には大反對であつた。彼は云つた、「君は自然が自分自身ですることのできない排出の習慣をつけるわけだ。だから、若し忘れるとか、その他の原因でそれを怠ると自然はどうしてくれることもできない。で、君は急に悶絶するかも知れない。他の定期的排出の習慣をつけるのは差支へない、何故なら、ひよつとそれを怠つても自然がその補ひをつけてくれるから。然るに自然は君の瀉血をするために血管を開くといふことはできない。」——テーラーは云つた、「わたしは吐劑を用ふるのは好まない、小さい血管を破る惧れがあるから。」——ヂョンスンは云つた、「フフン！　そんなにあれやこれや破れさうなものを持つてゐるのなら一と思ひに頸の骨を折つぴしよつてしまつた方がましだ。さうすればもう世話なしだ。小さい血管を破るといふやうなことも無くなる。」（思ひ切り嘲けるやうな太い息をしながら。）

私はヂョンスン博士に向ひ、デーヴィッド・ヒュームが死ぬ時、飽くまで不信心を固執したことは私に強い衝擊を與へると云つた。ヂョンスン、「何も衝擊を感ずるわけはあるま

い。ヒュームは新約聖書を注意深く讀んだことはないと告白してゐる。即ち、此處に宗教の眞理を究めようといふ努力を少しもせず、絶えずそれと反對の方向に心を向けてゐた男がゐたわけだ。死期が迫つたからとて、神が彼を矯正するために天使を遣はしたまひでもせぬかぎり、彼の考へ方が變るなどゝいふことは期待できない。」私は、壞滅に歸するといふ考へがヒュームに何んの苦痛をも與へなかつたと信ずべき理由があると云つた。ヂョンスン、「それは君、さうでないのだ。彼は平氣だと人に考へられたいといふ虛榮心をもつてゐたのだ。人間が知られざる國に行くことを――彼のまやかしの理論にもかゝはらず、彼には其所に必ず行かないといふ確信も無いのだから――恐れないとか、自分の知つてゐるすべてのものに別れを告げるのを不安に感じないとかいふ、最も有りさうもないことが、有ると云ふよりは、彼が平氣を裝ふてゐるのだと云ふ方が當つてゐさうだ。尙、彼自身の壞滅に歸するといふ理論から云へば、彼は眞實を語るべき動機をもつてゐない、といふことを考ふべきだ。」私が常にヂョンスンの中に見た死の恐怖は此の晩强く顯れ出た。私は、自分の生涯の中で、何度か瞬間的に死を恐れなかつたことがある、だから誰か他の人が相當期間さういふ心的狀態に在るといふことも想像できる、と敢へて云つて見た。彼は云つた、「あの男に、死が恐ろしくなかつた瞬間は決して無かつたんだ。」彼は更に、公衆の前で死ぬ人間は殆どすべて、外見上平然として死に就くと云はれてゐるが、それはわれ〳〵を寸時も去らない、賞讃を欲する念からだ、と附け加へた。私は、ドッド博士は、快く死

に就き、幸福の希望に充ちてゐたらしかつた、と云つた。彼は云つた、「ドッド博士は生きていけるなら兩手も兩脚も投げ棄てたことだらう。人間が上等ならば上等なほど絶對的無拠難狀態がより明かにわかるから、一層死を恐れるわけだ。」彼は、われ〳〵が自らの救濟について不幸なる不安定の狀態にあるのは不可解なことであると認めた。そして云つた、「ああ！　われ〳〵は多くのことを明かにしてもらふためにはあの世に往くまで待たなければならぬ。」ヂョンスンの力强い心さへも未來の前にはうち挫かれたやうに思へた。が、私は嚴かな宗教的思索に於ける不安定の陰鬱さは希望と雜つてゐるから不信心の空虛より

一七七年七月

は一層慰めあるものであると考へた。人は重苦しい空氣の中では生きてゐられるが、全然空氣の無い排氣鐘の中では死んでしまふ。

・・・・・・・

この晩「九月十七日」彼は、ホイッグ黨である彼の友人に逆らはうといふ氣持も手つだつてのことゝ私は思ふが、スチュアート王家に對する現在の英國民の思慕に關してテーラー博士と激論をたゝかはせた。彼は次のやうな極端なことを云ふに到つた、「もし公平に英國民の一般投票を行つたら現在の王は今晩追ひ出され、それに附く者共は明日首を絞られるだらう。」ヂョンスンがトーリー黨であると同じ程度に猛烈なホイッグ黨であるテーラーはこの言葉に憤激してその語調は咆吼に近くなつた。

・・・・・・・

九月十八日（木曜日）。昨晩ヂョンスン博士はテーラー博士の廣間にある玻璃燈又はシャンデリアはたまには點けて見たら良からうと云つた。テーラーは明晩點けて見ることにしようと云つた。私は云つた、「それは非常にいゝでせう。明日はヂョンスン博士の誕生日ですから。」われ〳〵がスカイ島に往つた時、ヂョンスンは自分の誕生日の話をしないやうに私に要望した。此の時も彼は私がそのことを持ち出したのを喜ばないやうであつた。そして幾分厳しい口調で云つた、「わしは明日玻璃燈を點けてもらひたくない。」

昨日私が彼の誕生日のことを云ひ出した時居あはせた數名の婦人は今日正餐に來て、そんなことゝは知らずに祝辭を述べて彼を惱ました。何故誕生日のことを云はれるのを厭やがるのか、それが彼の常に恐れてゐる死に、より近づいたことを思ひ出させるから、とでも云ふほか私には見當もつかない。

・・・・・・

九月十九日（金曜日）、朝食後ヂョンスン博士と私はテーラー博士の旅行馬車でダービーに向つて出發した。天氣は好かつた。われ〳〵はスカーズデール卿の住地たるケッドルストンを經由して往くことに決めた。私が卿の立派な屋敷を見たく思つたからである。私は建物の素晴らしさに打たれた。そして鹿、牛、羊の充ちてゐる大へん美しい綠草地をもつた廣い莊園は私を喜ばせた。恐ろしく大きい槲の老樹の多いことも一種の畏敬をまぢへた感嘆を催さしめた。そのうちの一本を六十磅で買はうといふ者があつた。立派な坦々たる

砂利道、美しい舟を浮べた大きな池（スカーズデール卿が幾つかの小さい流れを利用して作つたもの）、家の直ぐ近くにある、今はこの屋敷の會堂になつてゐる神々しいゴシックの教會、一言にして云へばいろ〳〵な物の壯大なあつまりは甚だ快よく私の心を動かし、暢暢せしめた。私は云つた、「かういふものをすべて所有してゐる人は幸福にちがひないと思はれますね。」ヂョンスンは云つた、「さうでない、すべてのかういふものはたゞ一つの不幸――貧乏――を除外できるだけだ。」

われ〳〵の名が通ぜられた。そして身なりの善い中年の、大へんはつきりした物言ひをする管理人が屋敷の案内をしてくれた。が、それについてはアダムの『建築誌』に記事が出てゐるからそれに讓ることゝしよう。ヂョンスン博士は今日はそれを見直したやうであつた。彼は最近次のやうに猛烈にそれを貶したことがあつたのだ、「あれは町會堂（タウンホール）にはもつて來いだらう。列柱のある大廣間は巡廻裁判の時判事が坐るのにいゝ。圓形の部屋は陪審員の部屋にいゝ。上の部屋は囚人を閉ぢこめておくに持つて來いだ。」今日も、しかし、大廣間は採光が悪くて舞踏會の他には役に立たず、寢室はあまり感心できない部屋だし、建築に要した莫大な金は無駄なところに使はれたといふ意見であつた。テーラー博士は、でもあんたは感服した樣子だつたではないかと前回の時のことを思ひ出させた。彼は云つた、「だつてあの時はスカーズデール卿が居合せた。禮儀から云つて本人が居合す時にはその人の造つたものに對して感服した樣子をしなくてはならない。それに疑問を挾むやうな

一七年　七七

不作法者もないだらう。だから、ほんたうでないことを云ふことなしにお世辭が云へるわけだ。わしはスカーズデール卿に彼の大廣間についてから云ふだらう、《閣下、これは私が今まで見たうちで一番お金のかゝつたお部屋です。》と、そしてそれには嘘がないのだ。」

ロンドンの警者でスカーズデール卿を訪問中であつたマニンガム博士がわれ〳〵と一しよに多くの部屋を廻つてくれたが、やがて、ヂョンスン博士のことを知つてゐるスカーズデール卿自身があらはれ、主人としてのもてなしをしてくれた。われ〳〵はラングトン氏の噂をした。ヂョンスンは激しい敬愛の念をこめて叫んだ、「この地上にはベネット・ラングトンほど立派な人物は何處を探してもゐません。」われ〳〵は大分澤山の名畫を見た。それ等については確かヤングの『周遊記』に書いてあつたと思ふ。印刷した目錄が有つて管理人がそれを私にくれた。閑な折に眺めたいと思つてゐる。私はレムブラントの畫いた、『ネブカドネザルの夢を解くダニエル』にひどく打たれた。われ〳〵は可成大きい圖書室を見せられた。閣下の更衣室にはヂョンスンの小さい『辭典』が置いてあつた。彼は幾分意氣ごんでそれを私に示して云つた、「見たまへ！《如何ナル地カ我等ノ勞作ニ充チテアラザランヤ》（譯者註、ヴアージルの『イーニーイッド』よりの引用）」彼は又ゴールドスミスの『動物界』があるのを見、かう云つた、「こゝにわれ〳〵の友人がゐる！　氣の毒なドクトル・ゴールドスミスはこの話を聞いたら喜んだらうに。」

旅の途中でヂョンスンは旅行馬車で快速力で駛ることの快味を口を極めて述べたてた。

曰く、「もしわしが義務をもたず、未來についての顧慮も無かつたら、わしは美人を伴つて旅行馬車を飛ばすことで一生を終りたいと思ふ。但し彼女はわしの言ふことを解し、幾らか會話の合槌の打てる女でなくてはならん。」私は今夜われ〳〵は千七百四十五年にハイランド軍が宿營した丁度その場所に泊ることになつてゐると云つた。ヂョンスン、「あれは崇高な企てゞあつた。」ボズウェル、「これについて權威ある歴史が書かれたらよいと思ひます。」ヂョンスン、「君が怠け犬でないのなら君がやつたらいゝ。そのことについて何か話せるすべての者からできるだけ聽きあつめ、又權威者の說を述べて書けばいゝ。」ボズウェル、「しかし私が生きてゐる間にはそれから利益が得られさうもありませんね。」ヂョンスン、「オランダで印刷すればいゝ。君は名譽といふ滿足が得られるわけだ。利益に到つては、物を書くことが金になるとかならんとかいふ見方がされるやうになつたのは近頃のことだといふことを考へて見たまへ。バレッティは、イタリーで原稿料を得たのは自分が初めてだと云つたよ。」私は、ヂョンスン博士が云はれたことをやつて見ませう、と云つた。

一七七七年

私は、何も外國の印刷所に往かなくても私の『千七百四十五年及び千七百四十六年に於ける英國の內亂の歴史』を書いて出版を敢へてすることができようと考へたのであつた。

ダービーに着くと、われ〳〵はバター博士に同伴されてこの地に於ける陶器製造を見物した。それに丸みを持たせるために轆轤を廻す少年のそばで、陶土をコップや敷皿や急須に造りあげる人の器用で微妙な技術に感服した。私はそれを、技術のその部門に於いては

優秀なものであると思つた――丁度見事な韻文を作ることがその部門で優秀であるごとく。が、私はこの陶工に對して別に敬意はもたなかつた。同樣に、多少とも心ある人は、いかに完全であらうともその中に詩が無い、精神がこもつてゐない歌を作る、單なる韻文製造者に對しては敬意をもたないのだ。陶器は美しかつた。が、ヂョンスン博士も云つた通り、値段が高過ぎた。こゝの陶製品と同じ値段で、同じ大きさの銀細工品を手に入れることができる、と彼は云つた。

私はダービーの町を歩き廻つて、いつも私が不案内な町を歩く場合に感ずる喜びを味はつた。そこでは直ちに物珍しさの感じが迫る。そして此の土地に於ける生活の姿についていろ〳〵と考へさせられる。それは大體から云へば何處でも似たやうなものであるが、細い點ではそれ〴〵違つてゐる。すべての事柄に於いて細い差異といふものは驚異すべきものである。先夜のこと、テーラー博士方で、顏剃りの話しについてヂョンスン博士は云つた、「千人の剃り手のうち、區別ができないほど同じやうに剃る二人はゐないのだ。」私が眞逆、と云ふと、彼は剃り方の各種各樣を一々說明した――剃刀を垂直に近く持つのと左程でないのと――長く剃刀を引くのと短く引くのと――顎の上の方から始めるのと下の方から始めるのと――右側から始めるのと左側から始めるのと。實際、氣管によつて、極く小さい口腔の範圍內で、何んといふ各種各樣な音聲が發し得られるかを考へて見れば、剃刀のあて方にもどれだけ多くの相違が有り得るか、納得がいくであらう。

一七七七年

われ〳〵はバター博士と正餐を共にした。この人の妻君は私の從兄弟のサー・ヂョン・ダグラスの娘で、この人の孫息子は名家クイーンスベリー家の推定相續人である。ヂョンスンと彼は大分醫學に關する會話を交はした。ヂョンスンは何所かでニコルズ博士の論文『醫者の魂につき』について述べたことがあると云つた。彼はかういふ話をした、「ニコルズ博士は、どういふ病氣であらうともその患者の心が平靜でない場合は醫者としてその治療にあたらうとしなかつた。彼はどんな藥を投じても効果がないと信じたからである。彼は曾つて或る商人の治療を試みたところ、自分の處方した藥が少しも効果を示さないことを見出した。彼は窃かに妻君に向ひ、御主人の御商賣が思はしくないのではありませんか、と尋ねた。妻君はそれを否定した。彼は尙暫く治療をつゞけたが、相變らず驗が見えなかつた。遂に患者の妻君は、良人の商賣が思はしくないのを發見した、と彼に告げた。ゴールドスミスが死に瀕したとき、タートン博士は彼に訊ねた、《熱の割合から云ふと、脈の方が非常に亂れてゐます、あなたの心は平靜なのですか?》ゴールドスミスは、平靜でないのだと答へた。」

正餐の後、バター氏と私は絹紡織工場を見に往つた。これはヂョン・ロム氏がイタリーから機械裝置をもつて來たもので、それに對する特許を有するものであつた。私は機械のことはあまり明るくない。しかしこの機械の單純さとその能力の多大なことは愉快な驚きを私に與へた。今度の會見の間に私はヂョンスン博士から、――人生が定めなく且つ短い

からと云つて技藝の仕事や人生の快樂を消極的な冷淡さを以つて考ふべきでない、さういふ冷淡は理性の缺陷、精神の病弱と考ふべきだ、何んとなれば、われ〳〵だけのことゝしてゞはなく、相次ぐ時代の多數人のことを念頭に置いて、幸福は全力をつくして長養さるべきものであり、そのよすがとなるものは、常に大切なものと考ふべきである。――といふことを學んだ。

「塵ひぢは山を作り、たまゆらは年をなす」ものだから、小さい部分を尊ぶのはよろしい。しかし、われ〳〵は事物の正當な評價を下すために綜合的な觀照を忘れてはならぬ。一瞬間が不安であるか、ないかは、別に重要であるとは見えない。しかし、それが次の瞬間、又その次の瞬間に於いて考へられることになると遂には大きな不幸ができてくるわけだ。同じことを幸福や學問や友情について考へなければならぬ。われ〳〵は何時友情が結ばれたか、正確な時間を云ふことはできない。一滴一滴と器を充たす場合、遂にそれをあふれ流れさす一滴があるやうに、一聯の深切のうちに、心をして遂に充ち溢れさす一つの深切があるのだ。われ〳〵はわれ〳〵の觀るところの事物を小さい部分に切り刻んで、各部分をはなれ〳〵に考へてはならない。人間生活の大きな全體を觀ずることによつてはじめて人は、自分自身の生命に正當な價値を認めると共に、バークレーの空想のごとく、世界中の偉大にして喜ばしいものが實際に「自己の心の中に包含されて」ゐるものゝやうに考へて自分が死ねば此等のものが全滅してしまふのだ、などと考へずに濟むのである。人の精神

が病氣で薄弱でないかぎり、それはそれ自身を遙かに超えて「遠く飛び翔り」、あらゆる種類の間斷なき活動のうちに世界を觀ずるのである。しかし、自分が死んだその日でもすべてのものは常に變らず派手やかであらうと考へて、歎いたポープの感想は無理もないものであり、誰しもさう思ふことであらうと認められる。われ〳〵はすべて自己の周圍に對してわれ〳〵自身の憂欝を移入しがちである。時の流れの孰れの一點を取つて見ても、他の一點に比べて恐らく同じぐらゐの若々しさと華かさが有るであらうことを思はずに。私がその中でかくも多くの愉しい情景を味はつた此の世に生れ出た前にも、幾千幾萬の死と葬式があり、家族等は彼等の最愛の血族のために憂ひに沈んだではないか。然るにさういふ陰慘なる事情が、聊かでも私に影響を與へたであらうか？　では、何故に私が經驗し、私が知つてゐる憂欝な情景が他人に影響を與へなければならないのか？　われ〳〵は、自分が老いぼれ、又は不幸になつた時、この地上に幸福が根絶やしになつたと考へるやうなことがないやう警戒しようではないか。

お茶の時、ヂョンスン博士はかういふ話をした――ドッド博士の信心深い友人の誰彼が、彼は「この汚れた世」を脱れるのだからと云つて彼を慰めようと試みたところ、彼はこの信心ぶつた口吻に同じない正直さをもつた、――「いや、いや、（彼は云つた）私にはそれは大へん愉しい世であつた。」ヂョンスンはかう附け加へた、「さういふ風にほんとのことを云つたことに對し、わしはドッドを尊敬する。實際は、彼は何年か、隨分と道樂な生

活を樂しんだのだからね。」

彼はかう云つた、――ロンドン商業區に於けるドッドの友人等は大いに彼を支持し、牢番が彼を逃げさせさへすれば一千磅を與へようと準備をとゝのへてゐた、と。又、ドッドの友人の一人で、彼の處刑の日の前の晩、誰でも彼をつれ出してくれる獄吏にやるつもりでポケットに五百磅を忍ばせてニューゲットの監獄のまはりを暫く徘徊した男を知つてゐる、と云つた。但し時機既に晩く、彼はあまりに嚴重に見張られてゐたのだ。ドッドの友人達は蠟細工の彼の人形を拵へさせ、それを本人の代りに置いておくつもりであつた。たしか、それは監獄の中に運び入れられた筈だ、といふ話もした。

・・・・・・・

彼は云つた、「ゴールドスミスは晩れ咲きの花だつた。若い頃には何處といつて特異なところは無かつた。但し、彼の名聲が高まると、彼の友人の一人は、彼が大學で秀でたところがあつたやうなことを想ひ出しはじめた。ゴールドスミスの方でも同樣に、その友人が頭角をあらはすにつれ、その人の若い時分のことを段々と想ひ出した。」

私はモンボッドー卿が私に語つたことを話した――卿は毎朝四時に眼を醒まし、健康增進のために、起床して窓を開いたまゝ、裸になつて部屋を歩き廻り、卿の所謂「空氣浴」をする。その後で再び寢床に這入り更に二時間眠る、と。いかなる場合でも、不釣合に大袈裟に云ひ表はされたと思はれることに對して反擊を加へずにはゐられないヂョンスンは、

から云つた、「それは君、結局、かういふことに過ぎない――彼は四時に眼が醒める、そして身體を冷やして、寢床の暖かさが宜い氣持に感ぜられるやうになるまでは再び眠ることができない、といふのだ。」

私は朝起きることの辛さについて語つた。ヂョンスン博士は私に云つた、「博學なカーター夫人が、一心に勉强してゐた頃、どうも思つた樣に早く起きられないので、かういふ工夫をした――或る時刻になると彼女の部屋の灯が、或る重い物を吊るしてある紐を燒き切るやうにする、その重い物ははげしい音をたてゝおつこちる。それで眼が醒めて、後は難なく起きられるといふ寸法だ。」しかし、私は、その後のところが私の困難とするところだと云ひ、何か、苦痛を感ずることなしに起きさせるやうな藥が發明されたら有難いのだが、と云つた。私は寢床の中に大へん長い間横になつた後でないと決して苦痛なしに起きられないのだから。恐らく自然の貯へのうちにはこれを可能ならしむる何物かゞ藏されてゐるだらう。私は自分の身體をそろ〳〵と持ち上げる滑車を考へたこともあつたが、それは私の心の傾向に逆らふわけだからやはり苦痛を與へることにならう。私は「惰性」を消散し、筋肉に彈力を與へることができる物が欲しいのだ。人間の肉體は、他の物質の作用によつて、それが曾つてあつた如何なる狀態にでもあらしめ得るものだらうと考へるから、又、起床することが不愉快ではなくて容易――否、時としては愉快である狀態を私は經驗したことがあるのだから、さういふ狀態を作り出すことは、手段さへ發見し得たら、可能

一九二七年

であらうと思ふ。われ〳〵は肉體を暖めることができるし、冷やすことができる、それを緊張させることもできるし弛緩させることもできる、だから、起床することが苦痛でないやうな狀態を作り出すことも確かにできるはずだ。

ヂョンスンは云つた、「人間は充分な睡眠を取るべきだ。ミード博士はそれを七時間乃至九時間だと云つてゐる。」私はカレン博士が、人は一度にとれる以上の睡眠をとるべきでないと私に云つた話をした。ヂョンスン、「その規則はすべての場合には、あてはまらない。病氣のために睡眠を妨げられる人も大勢有るわけだから。まさかカレンもたつた一時間眠つたゞけで起きろといふわけではあるまい。さういふ養生法は早晩《永久の眠り》に終ることだらう。」テーラー博士は、「普通の時間に睡たくならない人間は、他人より強いのではなく不健康なのに違ひない、なんとなれば健康な人間は、食べたい、飲みたい、睡りたい、といふすべての自然の傾向を強度に感ずるものだから。」と述べたが、私は非常にもつともな說であると思ふ。

ヂョンスンは今夜、私に、私の子供の教育に於いて、洗煉しないやうに忠告した。彼は云つた、「人生は洗煉に堪へないだらう。世間でやつてゐるやうにやらなければならぬ。」

アッシュブアンから馬車で歸る途中、彼は、前にも度々した通り、私に水だけを飲むことを勸めた。彼は云つた、「さうすれば、醉つぱらはないことが確かだからだ。酒を飲むとなると確かといふことに、いかなくなる。」私は、飲酒は止めたくない快樂だと云つた。

彼曰く、「なるほど、酒を飲まないことは人生から非常に大きなものを引き去ることである」には疑ひない。が、さうすることは必要かも知れん。」しかし彼は、自分の意見では酒を存分に飲むことは生命を縮めはしないと思ふ、と認めた。そして、大酒で有名な或るスコットランドの貴族（彼はその名を擧げた）の生活が、酒を飲まない人間のそれより、あらまほしくないものだとも思はないと云つた。「が、一寸待てよ、」と彼はいつもの頭の良さと穿鑿の正確さを以つて云つた、「あの男を醉はすには澤山の酒が入り用なのかね？」私は答へた、「葡萄酒か強いポンスを澤山飲まなきや駄目です。」——彼は云つた、「さうか、その點は具合が悪いね。」私はわが友の言葉をかういふ風に解說したいと思ふ、「直きに降伏してしまふ砦は、長い、頑強な抵抗をするものよりも、城壁を破壞されることが少くてすむ。」

一七七年

私は思ひ切つて、彼が英國人であると同程度に猛烈にスコットランド人である男のことを話した。その男は、掛値の無いところ、彼が英國人と比較してスコットランド人に對して抱いたと同じ輕蔑を、スコットランド人と比較して英國人に對して抱いてゐた。そして、この男がヂョンスン博士のことを、「怪しからん奴だ！ スコットランド人のことを、あんなに惡口するとは。」と云つてゐることを話した。これは、一寸の間、彼を「ひるませ」たやうに思へた。それは多分、「對照」の効果によつて、彼のスコットランド人に對する極端な偏見を幾らか新しい角度に於いて彼に露し示したのであらう。

われ〳〵がアッシュブアンに歸つた時には、テーラー博士は既に寢てゐた。ヂョンスンと私は二人だけで長い間起きてゐた。

・・・・・・・

バレッティが『文學的斷片』といふ標題でイタリーで出版した「評論」の中では、歴史家ロバートスン博士はその文體を「高名なるサミュエル・ヂョンスン」のそれに倣つて作り上げた、と述べられてゐる。わが友自身も同じ意見であつた。即ち、彼は或る時好い機嫌に乘じて私にかう云つたことがある、「君、もしロバートスンの文體に難があるとすれば、それはわしのお蔭だ。あんまり言葉が多過ぎることゝ、その言葉が大袈裟過ぎることだ。」

私は彼に、彼の『スコットランド西部諸島旅行記』の文體に關する若干の評言を含んでゐる、モンボッドー卿が私に書き送つた手紙を讀んで聽かせた。閣下はイコルムキルに上陸した時の、大へん美しい一節を褒めた。*が、卿自身の文體が極めて乾燥なところから、卿はヂョンスンの用語の豐富さと頻繁に比喩的表現を用ふることを非難した。ヂョンスン、「君、もしわしの文體中に餘計な言葉が、内容に不釣合な大袈裟な言葉が指摘できるなら、この批評は當つてゐる。しかし、さういふものを指摘できまいと思ふ。例へば、モンボッドー卿が感服した、《われ〳〵は今、あのあらたかな土地を踏んでゐる。》といふ節に於いてあらたかなといふ言葉は單なる叙述には何の役もしてゐない、それが無くても事實は解るのだから。しかし、それ故それは餘計なものだとは云へないのだ。何故なら、それは心

を特別の注意に――何か並々ならず重要な或る物が提出される所に對して目醒ますからだ。あらたか！　――何んでさうなのか？　然る後に文章はアイオーナに關聯した事情を縷々述べはじめるのだ。それから君、比喩的表現に至つては、これは適當に用ひられさへすれば文體上非常な長所となるものだ。何故なら、それは一つの觀念に對して二つの觀念を與へる――意味を一層明かに、そして一般に快感を伴つて傳達する。」

* 「今やわれ等は、むかしカレドニアの國の光明であつた、かのあらたかなる島を踏みつゝあつた。此所より野蠻の諸民族や放浪の未開人が知識の利益と宗教の祝福とを受け來つたのである。人の心より、すべての地方的聯想を排除することは、たとへそれを試みても不可能であらうし、又、たとへ可能であつても愚なわざであらう。すべて、われ等をわれ等の感官の力より離脱せしむるもの、すべて過ぎ去りしもの遥かなるもの未來なるものをして現在よりも優位ならしむるものは、思想する生物たる品位に於いてわれ等を向上せしめる。叡智や勇氣や道德によつて氣高くされた如何なる土地をも無頓着無感動に通り過ごさしむる如き冷やかなるさかしらは、吾より、又吾が黨の士より、遠くあれ。マラソンの野に立ちてその愛國の念力を增さず、アイオーナの廢墟にたたずんで敬虔の心ひとしほ熱く燃えざる人間は羨むに足らぬ。」

假りにわれ〳〵の周遊がこの氣高い一節以外には何物も齎さなかつたとしても、世界はそれが無駄でなかつたことを認めたに違ひない。ロイアル・ソサイエティー（王立協會）の現在の會長閣下サー・チョーセフ・バンクス閣下は私に向ひ、自分は此所を讀んでいたく心を打たれ、兩手を掴り合せて動くは無言の感嘆の姿勢をつゞけた、と語つた。

・・・・・・・

九月二十日（土曜日）、朝食後、テーラーが農場に出て往つた後で、ヂョンスン博士と私は二人きりで、憂鬱と狂氣とについて眞劍な會話を取り交した。私はいつも、彼がこの二つを誤つて一しよくたにする傾向があるやうに思つた。憂鬱は、「偉大な才智」と同樣「狂氣と近接してゐる」かも知れない。が、私の考へでは兩者の間には、截然たる區別があるやうだ。彼が狂氣について語るときには、大抵精神狀態が惑亂してゐる者――俗に「心亂れて」ゐる者のことを指してゐるのだと解すべきである。古代の哲學者のうち或る人々は、すべて、正しい理性から逸れたものを狂氣であると見做した。この問題についての古代人及び近代人の諸學說が蒐集され、各種の珍しい事實によつて解說されてゐるのを見たいと思ふ人はアーノルド博士の興味饒かな著作を讀むがよろしい。*

*『狂氣について』トマス・アーノルド醫學博士著、千七百八十二年ロンドン發行

ヂョンスンは云つた、「狂人は自分の恐れてゐる人と共にあることを喜ぶ。恐れる、と云つても犬が鞭を恐れるといふやうなのではなく、それに對して畏敬の念を抱いてゐる人を意味するのだ。」私はこの言葉の正しいのに感心した。心が動搖し沮喪してゐる者が、自分の畏敬の念を抱いてゐる人と共にあることは、精神の不安な動亂を抑制鎭壓し、或る確乎たる、そして少くとも比較的偉大なる物を觀ずることによつて自らを慰めることになる。

彼は附け加へた、「狂人は病氣の程度が低い間はみんな肉慾旺盛である。彼等は自分の心を慰め、自分が惱んでゐる不幸から注意を逸らすために熱心に欲望を滿足させようとする。

ところが病氣が惡化すると快樂では物足らなくなり、苦痛を求めるやうになる。* 仕事とそして困苦は憂鬱を防ぐものである。アメリカにある我が國の全軍隊中狂氣に陷つた者は一人も無いと信ずる。」

*われ〳〵は通常書中で、惡しき靈（長友サー・ヂョン・プリングルによつて私が始めて示唆された通り、これが結局、狂氣の一ばん有りさうな原因であると私は考へる）に遇かれた不幸な人々が苦痛に捌け口を求め、我が身を燒きむしり、時には火に、時には水に飛び込むといふ記事を讀む。シーワード氏は、ヂョンスン博士の言を確かめるやうな、注目すべき逸話を私に提供してくれた。ロンドンで大財産を獲得した商人が事業から引退しウスターに赴いて隱居した。彼の心は、日頃の仕事が無くなり、その代りになるやうな何事をも持つてゐなかつたので、それ自身を蝕んだ。かくて生きていくことは彼にとつて苦痛となつた。遂に彼は絶石病に取りつかれた。彼が最も劇しい發作の一つに苦しんでゐるのを見た友人が心配して言葉をかけると、彼は云つた、「なんの〳〵、御心配なさるな。今私が感じてゐる痛みは、この病氣のために私が忘れてゐる、心の實め苦に比べたら極樂ですよ。」

われ〳〵は、私にとつて、頗る重大な問題を眞劍に論じはじめた。ヂョンスンは友情にあつい心遣ひを以つてそのことを考慮してくれた。私は久しく、スコットランドに住んでゐるのがあまりに狹い世界と思へて不滿足であることを彼に訴へて來た。そして野心と教養と娛樂との大いなる舞臺であり、比較的に云へば地上の天國とも私には思へる所であるロンドンに主に居住したいとの望みを洩らしてゐた。ヂョンスン、「全く、君ほどロンドンに對して熱愛をもつてゐる人を見たことがない。わしは、そこに住みたいといふ君の望み

を咎めることはできない。が、わしが君のお父さんの立場にあつたとしたら、君がそこに定住することを承知しないだらう。わしは昔風の封建的考へ方をもつてゐるのだから。そしてわしはアフレックが見棄てられることを恐れるだらう――君は直きにもつと氣候の好いところに別邸をもつた方がいゝと思ふやうになるだらうから。・・・・」

私は、私の先祖の一人が騎馬の從者三十名を引き連れることなしには領地から外に出たことが無かつた話をした。ヂョンスンの慧敏と研究心はあらゆる場合に發揮された。彼は云つた、「その君の先祖は、金錢といふものが殆ど流通してゐなかつた時に於いて、領地から遠く出た時は、どうしてその三十人の從者と三十頭の馬を食はせたのかね？」私は、ダグラス（譯者註、サー・ヂェームス・ダグラス、一二八六年――一三三〇年、スコットランドの豪族で、ロバート・ブルースを助けた）が多數の供の者を引き具して聖地に赴いたといふ話をした一友人に向つて、同じ困難を提起した。ダグラスは自分の國にゐる間は、その國の產物を從者の食物とすればよいのだから十分彼等を養ひ得たであらう。しかし彼はその食物を聖地まで持つて往くことはできなかつた。又、それによつて金錢を供給されるやうな商業といふものが無かつたから、彼はどうして他國に於いて從者を維持することができたのだらうか？

私は、若し私がロンドンに住むやうになつたら、時たまそれを訪れた頃の何とも云へぬ樂しさは消え失せてしまひ、飽きて來はしないかといふ疑ひを挾んでみた。ヂョンスン、「君、聊かたりとも知性ある人間でロンドンを去らうと欲する者は居ないではないか。そんなことはない、ロンドンに飽きるやうなことがあつたら、その男は人生に飽きて來たのだ。ロンドンには人生が與へ得るすべてのものが有るのだから。」

ロンドンに定住することによつて私が先祖代々の屋敷を棄て去りはしないかといふ彼の疑ひを霽らすために、私は古來の封建的な主義を熱心に保持してゐること、そして「故郷ノ土」の「樂シサ」を十二分に感じてゐるといふことを確言した。私はかういふことについて彼の注意を喚起した――アフレックの領主は優雅な邸宅をもつてゐて、その前方十哩一も自分の所領地に車馬を驅ることができ、其所には彼に從屬する人々が六百人以上も住んでゐる。屋敷内には岩や森や水の、自然のロマンティックな美に富んで居り、私は自分の七「生命の曙」に於いて、古代の古典文學中の最も美しい叙述を其所の風景のあれこれにあてはめて見たことがあり、その聯想は今も私の心中に殘つてゐる。――すべてさういふ點七を考へて見ると私は屹度一年の中の一部を故郷で過ごし、變化を味はふことにより、又、年首府の知的貯藏の分け前をもち來ることによつて、一層それを享樂するであらう、と云つた。彼は終始私の話に耳を傾け、深切に、「君が今考へてゐる通りになることを希望する。」と云つてくれた。

彼は云つた、「田舍の紳士はできるだけ早く自分の夫人をロンドン訪問に連れていくべきだ。自分たちだけになつた時愉快な話題を持ち得るやうに。」・・・・・・

われ〳〵は心を退嬰と焦燥から防ぐためには仕事が絶對に必要であることを話した。殊に憂鬱に陷る傾向のある人々はさうである。そして私は或る人から聞いたアメリカの野蠻人の話をした。その蠻人は、ある歐洲人が金錢の御利益を盛んに述べたてるのを聞いてかういふ質問を發したさうである、「それは職業を買ふことができますか？」ヂョンスン、「確かにその言葉は蠻人にしてはできすぎてゐる。それから、君、金錢は職業を買ふことができるよ。それは世の中のすべての便宜を買ふことができる。いろ〳〵な種類の仲間を買ふこともできれば、あらゆる種類の娯樂を買ふこともできる。」

私は彼にフォースターの『南洋航海記』について語つた。私はそれを愛讀したのだが、彼はそれを好まないと云つた。彼は云つた、「そこには名文を書かうといふ氣取りが非常に多い。」ボズウェル、「しかし、彼は讀者を曳きずつて往きます。」ヂョンスン、「いゝや。彼はわしのことは曳きずつて往かない。わしを置いてきぼりにする。いや、わしを前に突き出す、と云つた方がいゝかも知れん。わしに何枚も一度に飛ばさせるからね。」

一日曜日（九月十二日）には、われ〳〵はアッシュブアンの教會に往つた。それは同じぐらゐの大きさの町で私が見たものゝ中では最も大きく最も立派なものゝ一つであつた。私は、儼かな公共的禮拜に對する私の好みが、人間の一般的贊同と物惜しみなさによつて支持されてゐるのを見て大いに心強く感じた。

ヂョンスンとテーラーはお互ひに大いに趣を異にしてゐるので、私は兩人が親交を保つ

てゐるのを不思議に思つた。兩人が同じ學校及び大學で學んだといふことはある程度までそのわけを說明してゐるであらう。が、サー・ヂョシュア・レノルヅはもつと有力な理由を私に提供してくれた、卽ち、ヂョンスンは、自分はテーラーからその相續人にされることになつてゐると云はれたと、レノルヅに語つたさうである。私はこの點について兎や角論ずることは控へよう。が、ヂョンスンがテーラーに大なる關心を拂つたといふことは事實である。しかしながら彼はこの時から云つた、「君、わしは彼を愛する。がわしはそれ以上は愛しない。わしの彼に對する敬意は增さないのだ。經外典（アポクリファ）にあるとほり、《彼の語るところは牡牛のことのみなり。》*だ。わしは、彼がわしと付き合ふのを非常に好んでゐるとは思はない。彼の生き方は決して十分僧職にふさはしいとは云へない。彼はわしがそれを見拔いてゐるのを知つてゐる。そして、誰だつて、しよつ中、感心しない、といふやうな眼で見られながら生きて往くのは厭やなものだ。」

*『エクレシアステイカス』三十八章二十五節、この章全體は、教養ある心が粗雜で無學な心に優越してゐることを示す立派な說明として讀まれ得る。

私はヂョンスンに、或る立派な人物だが、人間性に普通見られる優しさに乏しい、非常に剛い心を持つた人のことを話した。その例として、私がその人に、十年間も外國に往つてゐるその人の息子を、一度歸省するやうに招いたらよからうと云つて見たところ、「いや、いや、あれは自分の仕事をしてゐればいゝのだ。」といふ返事であつた。それを聞いてヂョ

ンスンは云つた、「わしはその人の、さういふやり方には贊成しない。金を作ることは人間の仕事の全部ではない。親愛の情を培ふことは人世の仕事のうち價値のある一部だ。」

夜、ヂョンスンは非常に上機嫌だつたので、幾つかの人物描寫をしてわれ〳〵を興がらせた。その中の何れかが私の保存と勤勉から脱け去つたことは遺憾なことである。私は經驗からして、わが友の會話を、その本來の味はひを多少とも維持して示せるやうに採集するためには、早速にそれを書き留めて置くことが必要なのを知つた。暫く經つて後に彼の言葉を記錄するのは、永く取つて置いたため萎びてしまひ、さうなつては新鮮だつた時の味はひを殆んど或ひは全く失つてしまつた果實又は野菜を砂糖煮にし漬物にするのに似てゐる。

私は讀者に、この晩私がヂョンスンの菜園から採集したものゝ一聯をさゝげることゝしよう。

「わしの友人、故コーク伯爵は我が一家の文學的な特質を維持しようと大いに望んでゐた。彼は上品な人だつたが、自分の地位の格式を維持しなかつた。彼はあまりに萬遍なく鄭重だつたので誰もそれがために彼に感謝しなかつた。」

「われ〳〵はヂャック・ウィルクスについてあんなに多くの評判を聞かなかつたら、彼の會話をもつと珍重したことだらう。ヂャックは多方面な話題をもつてゐる、ヂャックは學者だ、そしてヂャックは紳士の作法をもつてゐる。が、彼の名が地球の涯から涯まで、陽氣な話し上手の神樣のやうに喧傳された擧句では、われ〳〵は彼と同席して失望を感ずる。彼はしよつ中わしを目がけてゐた。が、わしはどつちかと云ふと彼に深切にしたいと思つてゐる。二人の張りあひはもう終つたのだ。」

「ギャリックの會話の陽氣さには纖細味と上品さがある。フットは人を一層笑はせる。が、フットには一座の興を添えるために金で雇はれた道化役の風がある。實際、雇はれるだけの價値は十分あるが。」

一七七七年

九月二十二日（月曜日）、私は不用意にもヂョンスン博士に向つて、「私は先生とマコーレー夫人と一しよに會はせて見たいと思ひます。」と云つた。彼は大へん怒つた。しばらく默つた後――その間に險惡な雲が眉間に漂ひはじめた――彼は怒鳴りだした、「いゝや。君を面白がらすために、われ〳〵が喧嘩してお見にかけるわけにはいかないよ。君は、二人の人をお互ひにつかみ合ひさせるのは非常に無禮なことだといふのを知らないのか。」

その後で、怒りを制して、もつと穏やかに出ようと思ひ直したらしく、かう云つた、「何もそれがために君が首を絞られるとか、水に溺らされるとかいふ程の罪だと云ふのぢやないが、非常な無禮には違ひないよ。」テーラー博士は彼の方がまちがつてゐると考へ、それについて内證で彼に談じこんでゐた。が、私は後でヂョンスンに向つて、私が悪かつたと認めた。即ち、私は包み隠さず、マコーレー夫人と彼との舌戰を見たいといふ氣持を云ひ

表はすつもりであつたことを白狀し、但し、その勝負がどうつくかは判つてゐるのだから、先生が勝つところが見たかつたのだと云つた。ヂョンスン、「勝負がどうつくか、はつきりしたことは云へないよ。お互ひに激情を燃え立たせるかも知れず、お互ひに對して苦い憎惡を以つて別れるかも知れないやうな論爭に二人の人間をけしかけるやうな權利は誰もつてゐないのだ。わしは、わしのことを誰かとの論爭にまき込み、それを聞いてみたいとたくらむやうな男とつき合ふよりは、自分の財布の用心をする必要のある男とつき合ふ方が未だしもましだと思ふ。これが――（われ〳〵の友人の一人の名を擧げて）の大缺點で、あの男は一座の二人の人間が意見の相違をきたすことを承知してゐる話題を持ち出さうと試みるのだ。」ボズウェル、「ですけれど、あの人は物事を學ばうと思つてさうするのだ、と申しましたよ。」ヂョンスン、「動機は何にもせよ、さういふことをするのは非常に惡いことなのだ。彼は、護身の術を學ばうといふ目的で二人の人間に決鬪させる權利がないと同樣に、さういふ際どいことをやつて物事を學ぶ權利はもつてないのだ。」

彼は、われ〳〵の知人である一紳士が客に對して御馳走振りが惡いと云つて大いに非難した。彼は云つた、「君、人が正餐に招ばれた時には、何かうまいものが無くては失望するものだ。わしは、自分の屋敷で骨牌會は催さないスレール夫人に、夕方に、砂糖漬菓子や普通よそで出ないやうなおいしい物を出すやうに忠告し、さうすれば結構客が集つてくれると云つてやつた。何故なら、誰しも口あたりの良い物が面倒も準備も要らずに目の前に

出されゝば惡い氣持ちがしないからだ。」生活と慣習のこま〳〵したことに對する彼の心遣ひはかくの如くであつた。

彼は、デヴォンシア公爵（この名家の當主の祖父にあたる）の人となりをかう評した、「彼は卓越した才能の持主ではなかつたが、一旦約束したことは堅く守る人であつた。例へば、人に髏の實をやる約束をしたところがその年彼の森でそれが一寸も實らなかつたとすれば、彼はそれを言譯けにして平氣で濟ますことはできなかつた。彼はそれをデンマークから取寄せたであらう。それほど約束を守ることは絶對的で、名譽の問題には潔癖であつた。」これはトーリーのヂョンスンの口から出た、偉大なるホィッグ黨の貴族に對する寛大な評言であつた。

一七七七年

・・・・・・・

夜、テーラー博士を訪問に來た一人の農家紳士が、エグリントン伯爵を射殺したマンゴー・キャムベルを辯護してヂョンスンと論爭しようと試みた。キャムベルは、伯爵が、威嚇した言葉の通りに銃を取り出すものと思つて、それから逃れようとしたがころんでしまつたので相手を射つたのである。彼は、自分もキャムベルがした通りにしたであらう、と云つた。ヂョンスン、「キャムベルがした通りにする者は絞罪にされる價値がある。わしが陪審として彼を法律上殺人罪と認め得るといふわけではないが。しかし、わしは當局者がどうにかして彼を有罪と認めたことを喜んでる。」その農家紳士は云つた、「貧乏人も金持

と同じだけの名譽を持つてゐる、キャムベルはそれを守らなければならなかつたのです。」ヂョンスンは叫んだ、「貧乏人は名譽なんか持つてない。」この英國の鄉士は悪びれずに言葉をつゞけた、「キャムベルが、さうすると射つぞと警告したのに、それに襲ひかゝるとはエグリントン卿は呪はれた馬鹿者です。」呪咀めいた言葉は我慢できないヂョンスンは怒つて答へた、「卿は呪はれた馬鹿ぢやなかつた。彼は只キャムベルを善く買ひ被り過ぎたのだ。彼はキャムベルがあんな呪はれた事をするほどの呪はれた悪漢であらうとは考へなかつたんだ。」彼が呪はれたといふ言葉に加へた強勢はその苦々しい顏付きと相俟つて、彼の前で相手が禮を缺いたことを咎め立てした。

權貴の者に近づきを求める際、拒絶されて口惜しい思ひをする危險があることについて私は云つた、「しかし、私は一般に、やつて見る方に賛成します。《虎穴に入らずんば虎兒を得ず》です。」ヂョンスン、「いかにもさうだ。が、わしはいつも成功を望むより失敗を恐れる念の方が強かつた。」實際、彼は高位に對する當然な敬意は十分に抱いてゐたが、彼ほど權貴の愛顧を求めることの少なかつた者はゐない。

アッシュブアンに於けるこの訪問の間、ヂョンスンは私が今まで殆ど見なかつたほど、むらなく社交的であり快活であり機敏であつた。彼は大きなことに對しても小さなことに對してもてきぱきしてゐた。自分のものを過度に自慢する癖のある、――即ち諺に謂ふ「己れの鶯鳥はみんな白鳥である」ところの――テーラーは自分のブルドッグの優秀であ

一七七七年

ることを盛んに述べたて、それは「完全な良い形をしてゐる」とわれ〳〵に云つた。ヂョンスンはこの動物を仔細にあらためた後に主人の空自慢をかう矯めた、「いや、この犬は良い形をしてゐない。何故なら、それは前半身の太い部分から後半身の繊細部（デニスティー）――細い部分――に急に移つてゐない――ブルドッグはさうでなくてはいけないのだ。」この繊細部（デニスティー）といふのは私が今回の訪問中で彼が用ひるのを聞いた唯一のむづかしい言葉であつたが、こゝに書いた通り彼は直ちに他の言葉で云ひ直した。テーラーは、小さいブルドッグは大きいのに劣らない、と云つた。ヂョンスン、「そんなことはない、それは大きさに比例して力をもつてゐるのだから。君の說を押しつめると、良いブルドッグは鼠のやうに小さくてもよい、といふことになる。」いかに彼が話題に登つたあらゆる問題に明晰と雋敏を以つてあたつたかは驚くべきものがあつた。私の知つてゐる大概の人間は、牡牛（ブル）に襲ひかゝつたりしないと同樣に、ブルドッグの問題を論じようなどゝ思ひ立たないであらう。

私は、この書の偉大なる主人公に關聯して私の記憶に漂つてゐるものは如何に斷片的なものでもそれが失はれてしまふのを見るに忍びないのである。些細な事柄は或る人々には取るに足らないと見えるかも知れないが、又一方にはそれを珍重する者もあらう。それに、小さな、一つ一つの火花は全體の炎に何物かを加ふるものである。ヂョンスンの眞實な純眞な熱心な崇拜者たちを喜ばし、彼の名譽の輝きを幾分でも益すためならば、私としては輕蔑の征箭、否、悪意のそれすらも物の數ではないのである。さういふものゝ雨は、私の

『ヘブリディーズ諸島旅行日記』にふり注がれた。が、それは今尙損はれることなく《時》の流れを走つて往き、ヂョンスンの扈從者として

「勝利を追ひ、疾風に伴つて」（讀者註、ポープの詩『人間論』よりの引用）

ゐる。

或る朝、食事を濟ませてから、太陽が照り輝いてゐる中をわれ〳〵は一しよに外に出て、暫くの間のんびりした氣分で人工の瀧を「うち眺め」た。それはテーラー博士が、庭のうしろの川に巖丈な石の堰を築いて作つたものであつた。それは今、川を流れて來て近くに溜つた木の枝その他のごみによつて幾分妨げられてゐた。ヂョンスンは水がもつと自由に落ちるのを見たいといふ氣もちと、時折は最も遲鈍物臭な人間をも活動せしむるところの、あのわが身を働かせたい衝動からして、土堤の上に横たはつてゐた長い竿を持つて來て、この邪魔物の幾かたまりかを大骨折つて突つつき落した。その間私は靜かにそばに立つて、この賢哲がかういふ變つた仕事をしてゐるのを驚異の眼を以つて眺め、彼が目的を果たすごとにユーモラスな滿足でほゝゑむのであつた。彼はすつかり息を切らしてしまふまで働いた。その時大きな猫の死骸を發見したが、それが非常に重くて何回かやつても動かすことができないので、竿を投げ出しながら彼は云つた、「おい君、今度は君がやる番だ。」私は云はれた通りにしたが、新手なだけに、直きに猫を瀧にころがし落した。こんなことは、記錄するにはあまりに些細な事だと笑はれるかも知れない。しかしこれは私が讀者に示す、わが友についてのフランドル派繪畫の細かい、特色的な筆觸とも云ふべきものであり、從

つて私は最も小さい細部をも描き記すのである。尙、「遊びたはむるゝイソップ」は古代の教訓譚の一つになつてゐることを思ひ合せて頂きたい。

私はわれ〳〵の知つてゐ　老人が記憶力を失ひかゝつてゐる話をした。ヂョンスン、「七十歳ぐらゐで記憶力が失はれるとは精神が病氣になつてゐるに違ひない。そんなに早くぼけるのだつたらその人の頭ィ病的なんだ。」彼自身六十八歳になつてゐる、わが友はさう考へるかも知れないが、しかし私は、『詩篇』の作者が、末世に於ける正常な人間の定命とした「七十歳」となつては、身體に病氣はなくても老耄が有り得ると考へるものである。

七　七　七　一　年

憂鬱症の話となつたが、ヂョンスン博士はそれを私が考へる程には有り觸れたものと考へなかつた。彼は云つた、「テーラー博士はどの日でも同じやうだ。パークやレノルヅは同じやうだ。ポークレアも苦痛のある時以外は同じやうだ。わし自身はさうでない。が、わしは通常このことを人に語らない。」

私は、長く引きつゞいては何事に對しても同じ見解を維持してゐられない程酷い氣の變り易さを訴へた。ヂョンスン博士と對座してゐるとこの不安から解放されるのを經驗できて大へん有難く感ずるのであつた。私自身の弱々しい、ゆら〳〵した想像力が屢々甚だ不安定な狀態に於いて提出し、私の理性が十分それを判斷できないやうな事物を、彼の確乎とした力強い精神はしつかりと把握して私の面前に示すのであつた。

ヂョンスン博士は此の日私に、できる限り多くの書物を座右に置くことを忠告した。その時々に、それについて知りたいと欲する如何なる題目についても讀むことができるやうに。彼は云つた、「さういふ時に讀むものは君の記憶に殘るよ。ところが、直ぐその場に書物が無くて、その題目が君の心の中で微が生えてしまへば、二度とそれを研究したいといふ欲望が起るかどうか疑問だよ。」彼は附け加へた、「知識を求める熱心な欲望がまるつきり無い人は、自分自身に勉強を課すべきだ。しかし、その場で氣が向いて讀むといふ方が一層善い。」

驛馬車内で彼はホレースの『詩賦』の多くの行を吟誦した。私は特に Ehen fugaces（譯者註、あはれ、飛び去り行く、の意）のオードがあつたのを覺えてゐる。

彼はホーマーとヴァージルとの優劣の論爭は不正確なものであると云つた。彼は云つた、「われ〳〵は、ヴァージルが最も優れた詩を作つたかも知れないがホーマーの方が最も偉大なる詩人ではないかと考へる必要がある。ヴァージルは叙事詩の構成の總體的發明について、又多くの彼の美しさについてホーマーに負ふてゐる。」*

* 私はランダトン氏から次のことを聞いた。――隨分昔のこと、自分はこの問題がヂョンスン博士とパーク氏との間に上下された時に居合せた。そしてヂョンスンの言葉を藉りて云へば二人は「最善を盡して論じた。」ヂョンスンはホーマー、パークはヴァージルの側に立つて。それが曾て行はれた最も有能で最も華々しい舌戰の一つであつたらうことは想像に難くない。それが保存されなかつたことは何と遺憾千萬ではないか。

彼はベーコンが彼にとつて愛讀の著作家であると私に語つた。しかし彼は『英語辭典』を編纂しつつあつた頃まではその著作を讀んだことがなかつたさうである。該『辭典』中にはベーコンが大へん屢〻引用されてゐるのが見られると彼は言つた。シーワード氏は彼が、ベーコンの書いたものだけからでも英語の辭典が編纂され得ると云つたこと、そして彼が曾つてベーコンの――少くともその英語で書いた著作の刊本を出さうといふ、又この偉大な人物の傳記を書かうといふ、意圖を抱いてゐたといふ話をしたことを想ひ出してゐる。彼がこの意圖を實現したとしたら、それを最も大家らしい手腕を以てなし遂げたらうといふことは疑ひを容れぬ。マレットの『ベーコン傳』はその主題に關する鋭敏にして典雅な論述として、決して尠少ならざる價値を有する。しかしマレットの心はヴェルラム卿（譯者註、ベーコンのこと）の天才と研究との廣大なる分野を包攝するに足る程大きくはなかつた。ウォーバートン博士は奇警に、しかも正しくかう云つた、「マレットはその『ベーコン傳』でベーコンが哲學者であることを忘れてしまつた。もし彼が、それを企てたことの有るマールバラ公傳を書いたとしたら恐らく公が將軍であつたことを忘れたことだらう。」

一七七七年

ヂョンスンと私との共通の友人が私に語つた、或るヂョンスンにとつて不利な話がどの程度まで眞實なのか突き止めたいと思つて、私は彼にぶつつけにその話をした。それはかういふ意味のものであつた。――彼と非常に親しい交はりを結び、彼に多くの深切を示し、彼を債務者留置場から救ひ出しさへしてくれた紳士が、後日逆境に陷つてゐたが、或る日、

ヂョンスンと正餐を共にしてゐた時に、負債のために逮捕され監獄に連れて行かれた。ヂョンスンは涼しい顔で坐つたまゝ飲み食ひをつゞけた。それを見てその席に居た、その紳士の姉妹は怒りを抑へかねて云つた、「何んといふことです！　あなた。あなたは、私の兄弟のこの急場に、一しよに往つてあげようとさへおつしやらないほど冷淡なのですか？　あれほど彼の厄介になつたあなたが。」すると、ヂョンスンはかう答へたといふのだ、「いや、わしは一寸も彼から恩を蒙つてゐませんよ。彼は私にしてくれたことを、犬に對してだつてしたでせうよ。」

ヂョンスンはこの話は全然嘘であると證言した。しかし、自分が正しいことを自信し、さういふ批難から完全に身を守らんと欲する者らしく、單に尊大な否定と自己の全般的人格の力に頼るだけでなく、次のやうに釋明した、「君、わしはその紳士と大へん親しくし、一度は彼によつて逮捕を免れたこともあつた。が、わしは彼が逮捕された現場に居合せたことはなく、彼が逮捕されたといふことも聞いたことがない。又、彼がわしを救つた時以後に困窮したことは一度も無かつたと信ずる。わしは彼を大いに愛した。が、彼の全般的人格を語るとなれば、わしは實際にさう云つた記憶はないのだが、かう云つたかも知れない――彼の寛大さは主義主張から發したものではなく彼の贅澤の一部なのだから、彼は友人に對してなしたことを犬に對してもしたであらう、と。けれども、わしはこの言葉を何か特定の事例に適用したことはない、わしにしてくれた彼の深切に適用したことは斷じて

ない。もし、自分の金を尊重せず、娼婦に大金を與へるやうな贅澤な男があつて、その半額の金又は同額の金を友人を救ふために與へるとしてもそれは善だとは見做され得ない。これがその紳士についてわしが云ふことの有り得た全部であつた。そして、假りにそれが云はれたとすれば、それは彼が死んだ後で云はれたに違ひない。君、わしは彼を救ふためなら世界の涯まで往つたことだらう。犬云々、といふ言葉は、もしわしが云つたとすれば、人のことを鮮明に描く際にわれ〳〵が口走つたかも知れないやうな*句に過ぎない。」

* この話をした友人はボークレアで、逮捕された紳士はヘンリー・ハーヴィらしい。（クローカーの註）

九月二十三日（火曜日）、ヂョンスンは私に對して甚だ親切であつた。私は近いうちにスコットランドに歸る必要があつたので、明日を出發の日と定めた。そして彼と別れることを考へて心の痛みを覺えたのであつた。彼は既に、隱しへだてなく多くの身の上ばなしを私にしてくれた。それはこの書物の適當な箇所にそれ〴〵按配されてゐる。私が不圖、私の旅行の費用が豫算額よりも遙かに超過するだらうといふことを洩らすと、彼は云つた、「君、もしその費用がもとで君が困ることになるのなら、君はそれを後悔する理由もあるだらう。が、それが費つていゝ金だつたなら、それを何か他のやり方で費つて、これだけの樂しみを買ひ得るとは思へないぜ。」

アッシュブアンに於けるこの訪問の間、ヂョンスンと私は屢々、われ〳〵のヘブリディーズ諸島旅行の際に起つた些細の出來事を非常な喜びを以つて語りあつた。この旅行は彼

の心の上に最も愉快な、そして永續的な印象を與へたのであつた。

夜、例の農家紳士と他に二人がやつて來てバイオリンに合せて非常に澤山の歌曲を演奏し彼等自身と一座の者を興がらせた。ヂョンスンは『大望に汝が心を燃えしめよ』を繰り返すやうに所望し、辛抱づよく聽き入つた態であつた。但し彼は、音樂の偉力は解らないと私に告白した。私は彼に、私にとつてはそれが隨分強い影響を與へ、屢々私の神經を苦しく搔き亂し、私の心に涙を催させるほどの哀感と、戰ひの只中にでも躍り込ましめるほどの勃々たる勇猛心とを交ゝ到らしめるといふことを云つた。彼は云つた、「君、若し音樂がわしのことをそんな馬鹿者にするのなら、わしはそんなものを聽かないだらう。」

音樂の効果の多くは想念の聯想によるものだと私は信じてゐる。スイス人が異國にあるとき、それを聽くと忽ちに、そして抵抗しがたい「鄕愁」（マウダーヴェー）を搔きたてられる、あの歌曲は音調の上からは何等本質的な力を持つてゐないのだと私は聞いてゐる。そして私は自分の經驗から、スコッチ・リール（譯者註、スコットランドの舞踏曲）は活潑ではあるが私に憂愁を感ぜしめることを知つてゐる。それは、私がそれを幼い頃、ビット氏が「北の山々」から兵士を騙り集め、あまたの勇敢な山岳地方人（ハイランダー）が國外に出征して二度と歸らないことになつた、あの時分によく耳にしたからである。然るに『乞食のオペラ』（譯者註、ジョン・ゲーの作、第一二六頁參照）の歌曲は、優にやさしいものが澤山あるのだが、私をいつでも陽氣にならしめる。それはロンドンの盛んな感じと潑剌たる精神との聯想があるからである。この晩、尋常普通の作曲になる歌曲の幾つかがあまり巧妙とは云へないやり方で演奏されたが、私の心は搔きたてられ、私は、指導者であり友人であるヂョンスン博士に對する純眞な愛着を自覺した。それには、彼が既に老人であつて、恐らくさう遠くない將來に私が彼を失ふことであらうといふ愛惜の念がまじつてゐた。私は劍にかけても彼を守りたいといふ氣がした。彼に對する私の尊敬と愛情は白熱的となつた。私は彼に云つた、「先生、わたしたちは是非毎年會ひませう——先生が私と喧嘩なさらないならば。」ヂョンスン、「いや君、わしが君に喧嘩をしかけるよりは、君の方がわしに喧嘩をしかけることの方がありさうだよ。君に對するわしの敬愛は殆ど表現の辭に苦むほど大きいのだよ。が、わしはしよつ中それを繰返して云ひたくないのだ。君の手帳の第一頁にそれを書きつけて置いて、二度とそれを疑はないでくれたまへ。」

一七七年

私は、彼の『人間の望みの虛しさ』に示されてゐる通り、不幸が此の世に於ける「人間の宿命」であることを述べた。しかし、いろ〳〵な物事が幸福の豫想の下に爲される——壯麗な家屋が造られ、美しい庭が築かれ、公衆の娯樂のための素晴らしい場所が設計され多くの人々がそれに集まる——といふことを述べた。ヂョンスン、「悲しむべし、これ等はすべて、幸福を求めるあがきに過ぎないのだ。わしがはじめてラネラ遊園に入場したとき、それはわしの心に、曾つて他の何所に於いても經驗したことのない、暢びやかな感じを與へた。しかし、クセルクセス（譯者註、ペルシヤの大王、在位紀元前四八六年——同四六五年）が、彼の無數の軍隊を眺めわたし、

百年の後にはこの莫大な人數のうち只の一人も生きてゐないだらうことを思つて涙を流したと同樣に、この華やかな賑はひの中の只の一人も家に歸つて物を思ふことを恐れてゐない者は無いといふこと、そして、こゝに集まつた各個人の想ひは獨りとなつた時には悲しいものであらうといふことを考へた時にわしは心を刺し貫かれるやうに感じた。」この感想は實驗的にも正しいものであつた。華やかさのどよめきの後に*鬱く倦怠の感じはそれ自身甚だ強い苦痛である。しかも、その時心が空虛になつてゐると、百千の失望と煩悶が押し寄せて人を苦しめるのである。わが讀者諸賢の多くもこの事の眞實であることを認められないだらうか？

＊ポープは歌つてゐる——

「あまりに安樂なる椅子てふ拷問臺に架けられて」

しかし私は、ある匿名の作家の千七百五十八年の作である美しい敎訓に富んだ詩『懶、（道德についての書論）』の中に、私の題目に極めて適切な二行の句があつたのを思ひ出す——

「つひに、倦怠や幸福の拷問臺になやみつつ
人は決してかゝる生活のために作られたるに非ずと告白す。」

私は、人が戀愛をして、しかも首尾よく成功しさうな希望が持てる場合、或ひは、明日何か好きなことをしようといふ計畫を抱く場合などは、われ〳〵がそれについて語り合つてゐる不幸感を防ぐことができはしまいか、と述べた。ヂョンスン、「時としては君の彩へ

るやうなことも有らう。が、一般的にはわしの結論はあまりに眞實だよ。」

ヂョンスンと私の二人だけで、淸らかな秋の夜の大分更けた時刻に、テーラー博士の庭に立つて空を仰ぎながら靜かに語りあつた時に、私は話を來世といふ問題に持つて往つた。わが友はなごやかな、甚だ優しい氣分にあつた。彼は云つた、「わしは、人が死ぬと早速すべてのことが明らかにされるだらうとは思はない、《攝理》のなされ方は徐々にわれ〳〵に示されるのだと思ふ。」私は、聖書の聖句の若干の言葉遣は、罰の永劫性についての恐るべき敎義を强く支持してゐるやうに見えるが、この威嚇は譬喩的なもので、字義通り實施されるのではないと希望してよくはないかと、思ひ切つて訊いて見た。ヂョンスン、「君は來世に於ける罰の意義を考へて見る必要がある。われ〳〵は來世ではもはや神に背く恐れが無くなると決めて了ふべき理由はもつてないのだ。われ〳〵は、天使等さへ全く安全の狀態にあるとは知つてゐない。否、われ〳〵は彼等の或る者どもが墮落したことを知つてゐる。だから、人間と天使とを方正の狀態に維持するがために、それから逸れた者共の罰せられるのを絕えず眼前に見る必要があるかも知れぬ。が、何か他の手段によつて方正からの墮落が防がれるといふことも望み得る。この問題についての聖書の文句の若干は君の云ふやうに甚だ强いものであるが、それはもつと緩和した解釋を許し得るかも知れない。」彼はこの畏こく、微妙な問題について、穩やかな口調で、斷定的であることを憚るもの、如く語つた。

夜食の後、私は彼の部屋に蹤いて往つたが、彼は私の請ひを容れて、スコットランドの最高民事裁判所の訴訟に於いて、當時自己の自由を主張しつゝあつた一人の黑人を辯護する議論を私に口授した。彼は常に、あらゆる形の奴隷制度に甚だ熱心に反對した。が、私は失禮ながら彼はそれについて、「知らずして熱心」になつたのだと考へるのである。或る時、オックスフォドで、大へん眞面目な人々と一座した時、彼の乾杯の辭はかうであつた、「西印度諸島の黑人たちの次の叛亂のために乾杯！」西印度諸島及びアメリカのわが植民家たちに對する彼の猛烈な偏見は機會あるごとに發揮された。彼の『課稅は壓政に非ず』の結びの近くで彼は云つてゐる、「黑人をこき使ふ者共の間に、自由を叫ぶ吠え聲が最も高いのはどうしたわけか？」．．．．．．．．

九月二十四日（水曜日）、．．．．．私はテーラー博士の歡待ぶりを感謝を以つて語り、ヂョンスンが彼を屢々訪れるのは必ずしも食事に御馳走が出るためばかりでないといふ證據に、一つの逸話を持ち出したところ、わが友はもうそれを忘れてゐたが、それを再び聞かれて微笑した。その逸話といふのはかうであつた――或る夕方、私が彼と共に坐つてさゐるとフランクがかういふ言傳てをもたらした、「お客さま、主人テーラー博士がよろしく申して居ります、そして明日、お客樣に正餐を共にして頂きたいと願つて屬ります。主人は野兎を手に入れたのです。」それに對してヂョンスンは云つた、「御主人によろしく申して頂きたい、わしは正餐を御一しよに致さう――野兎にしろ、家兎にしろ。」

朝食を濟ませてから私は暇を告げ、北に向つて私の旅行をつゞけた。．．．．

私はスコットランドへの道から大分大廻りをしてチャッツワス（譯者註、デヴオンシア公爵の居城）の壯麗を見物したのだが、その直き近くのイーデンサー旅館で出會つた、變つた出來事を省略するわけにいかない。その旅館は、たしかモールトンといふ名の大へん愉快な主人によつて經營されてゐた。彼はたま〳〵「有名なヂョンスン博士が手前共にお泊りになつたことがございます。」といふ話をした。私は主人がヂョンスンのことをどう思つてゐるのか聞きたかつたので、そのヂョンスン博士といふのは一體何者であるかと尋ねて見た。彼は云つた、

七七七年

「有名な女士のヂョンスンですよ。あの、世間で變物と云はれてゐる人ですよ。あの人は英國第一の文豪です。政府のために物を書いてゐるのです。外國と交通をしてゐます。天下の形勢を彼等に知らせてやるのです。」

私の、修飾――嘘と作り事が體裁よくさう呼ばれてゐるところの――無しの話に絶對的の信用を置いてゐるわが友は、自分がさういふ風に云ひ表はされたのを聞いて大笑ひをした。

560

サミュエル・ヂョンスン傳 中卷

昭和二十一年十二月二十日印刷
昭和二十一年十二月三十日第一刷發行

定價 拾五圓

譯者 神吉三郎
東京都神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者 岩波雄二郎
東京都牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
印刷者 小坂孟

發行所 東京都神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店
會員番號A一〇九〇〇四號
配給元 東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

918
42

年　月　日　117

東京中國文學研究會

終